
out3/ 「ヤメロー！ スーパーミュータントども、ぶっ飛ばすぞ！！」と少年は叫んだ

白霧島

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

fallout3ノ「ヤメロー！ スーパーミュータントども、ぶっ飛ばすぞ！！」と少年は叫んだ

【Nコード】

N6073S

【作者名】

白霧島

【あらすじ】

ウェイストランドに転生した主人公。

彼はリトルランブライトで数年を過ごし、ビックタウンに向かう途中スーパーミュータントに捕まる。

それと同時に前世の記憶を取り戻し、捕虜の末路を知り泣きながら叫んだ。

ネタやギャグを中心に書いていこうと思うこの作品。
別の作品で詰まっているときに更新するかも。

prologue

気を転じて鬼と成し、

人を転じて刃と成す。

心は転じて針と成し、

流を転じて龍と成す。

ようこそ、このクソツたれで醜く、そして何より自由なウエイストランドへ。

こつから先は誰も助けちゃくれねえし、人を助けりゃ鉛玉をプレゼントされる最高にサバイバルな世界だ。

生き足掻きたきゃ殺せば良いし、死に急ぎたきゃ死ねば良い。

奪うのも奪われるのも自由。

正に狂界。

だけど、テメエが生きてることを実感できる。

な？ 最高だろう！？

ウエイストランドはテメエを歓迎する。

さあ兄弟>>ブラザー<<、狂葬曲の始まりだ。

e p 1 (前書き)

何か書きやすい。

文面だけみるとスーパーミュタントが萌えキャラに見えてくるから不思議。

……つつ、ここ、は？

辺りに眼を向ける。

手術用具の格納されている台。

大きなライト。

ここは何かの施設のようだ。

「何で、こんな所につ？」

俺は呟きながらも周りから情報を得ていく。

ウェイストランドで人が生きていくのに必要な技能は多々あるが、情報は一番重要ともいえないが必ずなければいけないものである。

自分は手術用のベッドの上に横になっていて、部屋はまるで実験設備のような造りだ。

次に身体の状態。

倦怠感はあるがそれ以外の異常は見当たらない。

むしろ以前より良くなった所もある。

例えば眼だ。

俺は眼鏡を掛けないといけない位には眼が悪かった筈なのだが今は鮮明に辺りの物が認識できる。

「っしょ」

寝台から下りて見えそうな物がないか探す。

すると端末のある机の上にレーザーピストルを発見する。

弾丸も九十発分程見つけたので暫くは大丈夫だろう。
更に部屋の隅にあるロッカーを見る。
ロッカーには俺の所持品と機械的な腕輪があった。
詳細不明な腕輪。

「いや、俺はこれを知ってる」

見たこともない物を知っている。

「そうコレは……」

その不可思議な感覚について考えるうちに、

「ピップ、ボーイ」

俺はこれまでの経緯を思い出した。

その日俺はリトルランブライトから巣立った。一定以上の年齢、詰まり大人と成った者はリトルランブライトから出て行きビツクタワーへと移り住む。

俺は実戦こそしたことはないが対人戦の理論や武器の手入れと扱い方、トラップ等への知識について相当な物を持っている言わば天才と言つものらしかった。

らしかったと言つのは自分にその実感が湧かなかつたからだ。

俺は何故か効率のよい勉強法や対話術、身体のトレーニング法等をまるで習慣のよう無意識下でにやり続けていた。

そして何時の間にかそう呼ばれていたのだ。さてそんな他称天才だった俺でも外の世界は知らずに少し浮かれていた。

そしたらもの見事にとっ捕まっちゃったのさ。

あの緑色の怪人達に。

奴らは俺の何が気に入ったのか研究所のような所へ俺を連れて行き、俺を寝台の上へと拘束した。

その時頭を強くぶつけた俺は、前世の記憶とこの世界によく似たゲームについて思い出した。

そして緑色の怪人、スーパーミュータントが俺を同族にしようとしている事に前世の知識から気付き、寝台で暴れながら叫んだ。

「ヤメロ！ スーパーミュータントども、ぶっ飛ばすぞ！！」

と。

「……仮面ライダーかよ、ショットカーじゃなくてスーパーミュータントかよ」

俺は一人呟く。

しかし可笑しい。

FEVウイルスに感染したのなら俺の身体もスーパーミュータントの様に变化するはずだ。

「あ、端末」

ふと目に入った端末の前まで移動する。

ロッカーにあったピップボーイの件も含めて何か情報が得られるかもしれない。

幸い端末にセキュリティはなく、俺は端末から情報を引き出した。

纏めるところだ。

・この部屋にあったFEVウイルスはマッドサイエンティストの手により改良が加えられていた。

・改良点はスーパーミュータントの力はそのままにして容姿は人を保ち寿命も伸ばし、スーパーミュータントの欠点でもある知能欠落を改善した。

・ピップボーイはVault101から逃げてきた奴から略奪し、個数が二個で余ったから此処に置いていったらしい。

「わーい、化け物の仲間入り」

乾いた笑いが口から漏れる。

因みにこのマッドサイエンティスト、最近はデスクローの聖域でデスクローと喧嘩しながら過ごしているらしい。

だがこれは有り難い。
容姿そのままにスーパーミュータントの力ならかなり生存率があがる。

オマケに放射能も気にせず寿命まで延びると来た。

至れり尽くせりとはこの事だな。

「……これを、あいつ等に知らせなきゃな」

思い出すのはリトルランブライトの家族達の顔。

家族達は放射能こそ大丈夫だが、病気の治療に薬が足りなかったり洞窟での環境とかが色々不便だ。

だがコレさえあればそんな奴も助かるし、何より放射能に一生怯えなくて良い。

ウィルスの瓶はかなりある。

あいつ等に良い暮らしをさせることが出来る。

……そう思っていた時期が俺にもありました。

端末から得た保管場所で見えた物は馬鹿なスーパーミュータント達がウィルスの瓶を破壊しているところだった。

「新しい未来の為にー！」

「不良品は破棄だあ」

「人間、バカだあ」

ブチッと、堪忍袋の尾が切れる音を聞いた。

どうやらスーパーミュータントの強化は堪忍袋にまでは手が回らないらしい。

「馬鹿はお前だああアアアア!！」

怒号。

怒りを込めた叫びにスーパーミュータント達は身を竦ませこちらを見た。

「し、失敗作う?」

「お、脅かすなあ!」

「人間馬鹿だあ!」

「まだ言うかああアアアア!」

怒りに任せ三体のスーパーミュータントに殴りかかる。

その際にとつもない身体能力で接近しボッコボコに殴りまくった。スーパーミュータントは動きに付いて行けていなかった。

「や、やめえ」

「いたい」

「人間馬鹿だあ」

……最後の一体は念入りに殴っておいた。

何て事が起き、今俺は三体のスーパーミュータントと共に施設の外

(ランブライトの洞窟に近い事から恐らくvault87だろ)にいる。

何故スーパーミュータントと共にいるかと言われれば、

「つ、強い」

「怖い」

「や、止めてくれえ」

「殴られたくなければ従え。俺は今とっても苛ついてんだよ」

という風に力で脅し子分にしたからだ。

ビバ、ウェイストランド。

暴力は怪物すら従えた。

さてそんな俺の今後の行動目標だが、取り合えずは武器と弾薬集めから始めて安定してきたら医薬品を手に入れリトルランブライトに供給するといったものだ。

一人でも戦えるが、三体のスーパーミュータントに連携を教えればレイダーやミレルークを代表するモンスター達など障害ではなくなる。

よい滑り出しに思わず口角がっり上がる。

先ずは、レイダーを襲うか。

「野郎共、レイダー共を襲い武器を手に入れるぞ。お前たちの大好きな殺し合いだ、気合いを入れるよ!!」

「応う!」

「了解だあ、ボス!」

「殺す! 殺す!! 殺す!!!」

一人目のスーパーミュータントは中国軍アサルトライフルを掲げ返

答する。

名前はジヨナサン。

二人目のスーパーヒーローは知性と落ち着きが見え始め、肩にミサイルランチャーを担ぎ返答する。

名前はクリフ。

三人目のスーパーヒーローは野生に満ちた破壊衝動を前面に出しながらスーパーレスジを振り回し返答する。

名前はジェイソン。

因みに名前はそれぞれの性格や印象からつけた。

名前を付けられたのが嬉しいのかこいつらは素直に俺の言うことを聞いた。

色々と陰謀の渦巻くウェイトランドだが俺は生きていける。

さて、頑張るか。

レイダー狩りを始めて一週間程が経ち、俺達は拠点は何処に作るかを話し合っていた。

拠点の重要性は語るまでもないだろう。

ピップボーイに荷物を格納できなくなった時に弾薬や金、武器防具類を鍵の付いたロッカーなどに入れる保管。

寝床や食い物、治療器具などを揃え活用する回復。

作業台で行う武器などの製作及び整備。

その他にも色々な要望はあるが、最低この三つが揃えば旅はかなり楽になる。

というわけで話し合いを始めたのだが、意見は全く纏まらない。

「俺え、眠い」

「やっぱり高いところだよなあ」

「待てえ、サソリイ、喰ううー!!」

頭を抱える。

ジヨナサンは今にも眠りそうでジェイソンは必死で逃げる巨大ラッドスコルピオンをスーパースレッズジを振り回して追いかけてる。

「……………」

アホらしかった。

スーパーミュータントに意見を求めた自分がアホらしかった。

「ボスウ、元気出せえ？」

三体の中で知性を獲得し始めているクリフが肩に手を起き俺を慰め

る。

もはやコイツが心の支えだよ。

そんなこんなで話し合いに成らないからテンペニータワーの周辺を探索する。

すると壊れた教会を発見した。

教会にはラジオ、ベッド、木の机と多数のトラップが設置されていた。

トラップを解除し探索中に見つけた廃墟から木材を中心にした瓦礫を運び教会を修繕した。

スーパーミュータントが三体もいると運ぶのが楽で日が暮れないうちに修繕は完了してしまった。

「取り敢えず今日から此処を拠点にする。探索の際は必ず二人が残りここの警護にあたること。OK?」

拠点の警護についての方針を簡単に説明しちゃんと理解したかを聞く。

「OK!」

「OK」

「だが断るう」

ジェイソンの晩飯はみんなで仲良く分けて食べた。

それから数日後。

生活も安定しそろそろ大きな街に出掛けようと思ったその時、ソイツは現れた。

「た、助けてください！ レイダーに追われて、ってギヤアアア！
スーパーミュータント！？ 望みが絶たれたー！！」

そう言っただけで騒いでいるのは栗色の髪を腰のあたりまで伸ばした小柄な女だった。

Vault 101のジャンプスーツを着た彼女は助けを求めたと思っただけのスーパーミュータントを見てウエイストランド人がよく口にする台詞叫んだ。

忙しい子である。

「安心しな嬢ちゃん、このスーパーミュータントは俺の子分だ。人を無闇に襲ったりはしない」

「えっ、そうなの？ ってそうじゃない、助けて！ 何でもするか
らー！！」

・「lady killer」じゃあ報酬としてあんたを貰うぜ？

・「karma」任せな、あんたは俺達を守る！

・「strength」手前の面倒は手前でみるよ。ウエイスト

ランドの掟だぜ？

「じゃあ報酬としてあんたを貰うぜ？」
「へ？ ……ふえっ?!」

彼女の左腕にあるピップボーイを見ての判断だが彼女がいればかなりの品物を街へ運び売り出すことが出来る。

それに旅に花が出るしな。

などと考えながら何故か顔を赤くしている彼女を教会の中へ入れ旅の仲間たちに号令をかける。

「野郎ども、久々の狩りだ！ 目標はレイダー、じっくり楽しみ！」

「応よお！」

「了解い！」

「殺す！ 殺す！！ 殺す！！！」

俺達は武装し教会の外へ出た。

「新鮮な肉だあー！」

遠くの方で叫ぶレイダー達を見る。

数は七人。

それぞれアサルトライフル装備が二人、10？ピストル装備が三人、

中国軍軍刀装備が二人といった構成だ。

武器の状態は良さそうで、修理して売れば結構な金になりそうだ。

「おおおおおおおおおおおおおおおつ！！！！！」

ジェイソンがスーパースレッジを構えながらレイダーのグループへと突撃する。

「化物退治だあ！！！」

アサルトライフルを持ったレイダーが叫びながら狙いをジェイソンへ向ける。

そのレイダーにスナイパーライフルの銃口を向けスコープを覗く。

「ところがギッチョン、てか？」

バガン

発砲音

トリガーを引く。

弾丸は轟音と共にレイダーの右腕を肘の関節から撃ち飛ばした。

「直撃、いい腕ですボス」

「まあな」

隣でミサイルランチャーを構えながらクリフが言う。

俺はそれに軽く応え再びスコープを覗く。

「あ、アアアアアアアツ!? う、腕! 俺の腕を盗んだ奴は誰だ! 返せよ! いてえんだよお!!!」
「なら、ラクニシテヤルヨオオオオオ!!!」

メキヤ

破砕音

ジエイソンの振るスーパースレツジがレイダーの鎖骨あたりに当たり頭を含めた身体の重要な器官をバラされ、その汚い肉塊を辺り一面にバラまく。

「あの馬鹿、頭だけを吹き飛ばせつてあれほど言ったのに。あれじやアーマー引つ剥がしたときに余計な修理をしなくちゃならないじやねえか」

「ジエイソンにそれを求めるのは酷でしょう?」

話題のジエイソンはその後も二人目、三人目とレイダーを叩き潰していく。

「俺が何したつて言うんだー!?!」

とレイダー達は逃走を始める。

「ジヨナサンは?」

「定位置に」

「そっか、ならやれ」

「yes boss」

逃げるレイダー達へと慎重に狙いを付けていくクリフ。腰を落とし片膝をつくことで姿勢を安定させている。

「遠距離火炮支援、実行。目標、逃走阻止」

機械的な口調で呟いた後、クリフは引き金を引く。

銃口から放たれたミサイルはレイダー達の進路上に着弾し、爆風と熱により敵の動きを阻害する。

「グアツ！？ 眼がアツ！！」

「こつちだ！ 物陰に隠れる！！」

レイダー達は狙撃と爆撃を恐れ、近くにある棄てられたら家の中に逃げ込む。

「これで奴らは袋のネズミだ。後はジョナサンに任せて戦利品を回収するぞ」

「了解い」

「物足りネエ！」

ゴチャゴチャと文句を垂れるジェイソンを二人で引きずりながら俺達は回収作業を始めた。

廃墟。

レイダー達は転がるように部屋の中央にたどり着くとサイコやジェ

ットなどの薬を自ら投与していく。

「くそつ、化け物共があ！」

「けどよ、此処に居りゃ少しは安全だろ？」

「安全？ それは今のお前たちには程遠い言葉だ」

全員の視線が二階の手すり部分に集まる。

そこには中国軍アサルトライフルを両手に構える一体のスーパーミニ
ユータントがいた。

「game overだ、弾丸ブチ込んで蜂の巣にしてやるよおお
おー！」

「望みが絶たれたあ！」

廃墟には連続する銃声とレイダー達の悲鳴が響いていた。

ep2 (後書き)

vaultのアイツは女の子でした。

男でも良かったけど周りがあれだから女の子にしました。

e p 3 (前書き)

何故かすらすら書いてしまう本作品。

やっぱり原作の自由度の違いなのだろうか？

などと思った今日この日この時間。

と言っわけで第三話どうぞ。

「……つまりは親父を捜して三千里つてわけか」

「はい。……三千里つてなんですか？」

教会。

作業台代わりの机に向かい合いながら座りまるで面接か尋問でもするかのようになり事情を聞く。

彼女曰く、v a u l t 1 0 1 が騒がしいと思ったたら親父が脱走したり巨大なゴキブリが飛び交ってたり警備員に襲われたりしながらウエイストランドに出た。

何を言ってるのか自分でも良く分からない。

レイダーとかタロンシャダーとかそんなものじゃ断じてない、もつと恐ろしい世界の片鱗を味わった。
とか。

「そりやまた災難だな。ま、俺達といりやデスクローが戦術でも使わない限り大丈夫だから安心しな」

「デスクローってなんですか？」

その返答に転けそうになったが、v a u l t 1 0 1 から出てまだ一ヶ月も経ってないと言っていたのを思い出し仕方ないかと思いがながらも色々なモンスターについて説明をした。

「で、お前さんはどこを目指していたんだ？」

「はい、父の手がかりを探すためにメガトンという街を目指したのです。けど途中で道に迷ってしまい、オアシスって村でツリーマインダーさん達の頼みを聞いたたり……」

頭が痛くなる内容だった。

メガトンを目指して何故オアシスにたどり着くのか不思議でならぬい。

「……ピップボーイのマッピング機能は使えないのか？」

「あ」

基本アホっぽいな、この娘は。

今はマッピング機能を色々試してキヤアキヤ騒いでるし。

そういえば全く関係ないのが、この場所は本来ゲームでは表示されないのだが俺達が修理して拠点にしたからかマップに表示されるようになった。

その名もネオヒューマノイド聖堂。

これはあれか？

FEVウイルスによる新しい人類として俺を表しているのだろうか。

……ま、どうでもいいや。

今はとにかくこの娘が問題だ。

ピップボーイの機能をしっかり教えないと間違っつてスナイパーライフルの強化にバックガードライフルとか使いそうだ。

それは不味い。

あれはドリフターズから撃ち落としたり三日待たないと出ないアイテムなのだ。この世界ではどうだか知らないが、取り敢えず何も解らずにゲームをやり良いのが手には入ったと思ったら別の武器の強化に使って消えたとか切なすぎる思い出だ。

「あの、それですね……」

「あん？」

思考が脱線していたようだ。

前を見れば彼女が何かを言いずらそうにこちらを見ていた。

「自己紹介、しませんか？」

ああ、そりゃ言いづらいな。

そついや自己紹介してなかったっけ。

「そいつはすまない。俺はケイト、今後とも宜しく」

右手を差し出し握手を求める。

「はい、私はメアリーって言います。此方こそ宜しくお願いします
」！」

彼女、メアリーが右手を出し握手に応じる。

「ご主人様」

……………まで。

なんだその斬新かつ男心を撥る渾名は。

「……………今、なんと？」

「え、ご主人様って呼びましたけど？」

「何故に？」

「だ、だって、私はもうアナタのモノなんでしょ？」

顔を赤く染め上目遣いでこちらを見るメアリー。

これは、不味いな。

しかしアナタのモノ？ いったいどういう「じゃあ、報酬としてあんたを貰うぜ？」……………ってうわ、思いつきりに覚えがあったよ。

てか、普通そうとしか聞こえないよな。
なに言ってるんだよ、その時の俺。

「えーと、だな」

「私は、それでも、構わないですよ」

「あ」

俺は思ってしまった。

このままでも別に良いじゃん、と。

奴隷とかも居るくらいだし（かと言って別に非道な扱いをするわけでもないが）今のウエイストランドで己の身を売る肉体労働は別に不思議でもない。

それに、このちょっと抜けてて小柄で胸が貧相でそれでも可愛らしい彼女が俺のモノとか言うんだ。
嬉しくない訳ないじゃん。

「……ああ、その通りだ。これからしっかり働いてくれよ、メアリ」
「？」

「はい、宜しくお願いします！」

満点の笑顔。

リトルランプライトの家族達もそうだが、純粹な笑顔はウエイストランドの至宝ではないだろうか。
胸が熱くなる。

これからもっと楽しくなりそうだ。

「あ、それと」

「はえ？」 「旦那様って呼んでみて」

「旦那様？」

小首を傾げてその言葉を口にするメアリ。
胸が熱くなった、色んな意味で。

夜。

ウエイストランドに闇の帳が降り、当たり一面が真っ暗になる。

「今日はジョナサンが帰りに遭遇したバラモンが晩飯だ。しっかり食って明日も頑張ろう！」

「応！」

「了解！」

「いただきマウス！」

晩飯。

俺達は待ち伏せ地点から戻ってくるときジョナサンが穫ってきたバラモンの肉を焼き肉にして食べることにした。

味付けにはフルーツを始めとした色んな食用植物を煮込んで熟成させた特製ソースを使っている。

ソースの味は少し辛みの強い甘辛といった感じでとても食欲をそそる香りを発している。因みにバラモンから取れるバラモンステーキはジョナサンが食べる。

獲物を穫ってきた物が一番よい部位を食べることで不公平さをなくしがんばればより良いものを食べられると考えさせることでやる気を出させる。

原始的ではあるがウエイストランドにおいてチームを組むときには有効な方法である。

しかしまあ、バラモンの肉を食べられるだけでも一般の奴等には贅沢な話だろうにこちらには調味料がある。

ソースが野菜を煮込んでそのまま放置した結果出来たものだと知っててよかった。

食事の質はそのままやる気に直結する。

スーパーミュータントの三人がしっかりと指示を聞く理由の一つに俺が胃袋を握っているからというのも有るだろう。

やっぱ胃袋は大事だよな、人心掌握において。

「美味しいです!」

「そりゃよかった。疲れてるだろうからたくさん食っとけよ」

「はい、一週間ぶりのマトモな食事なので遠慮を忘れます!」

「……………」

俺はこの娘が不憫に思えてしょうがなくなってきた。

安心してくれ、メアリー。

これからは食べ物では困らせないから。

「本当に、毎日が充実している」

「これからは私もその毎日に入るんですか?」

「ああ、改めてよろしくな?」

「はい!」

夜空には数多の星が灯火を放ち、地上では焚き火の火花が星になると空へ飛び、そして消える。

俺達は楽しく食事をした。

Another side

朝が来る。

vault101の外、ウェイストランドは広くて自分がどれだけ世界を知らなかったかを知った。

お父さんが脱走した後アマタに言われて直ぐに準備をし脱出を計ろうとした。

その途中で警備員に遭遇し、人の汚さを知った。

警備員は私の女友達を壁に押し付け身体を弄っている。

嫌らしい手つき。

下卑た眼差し。

女友達の顔は怯えと羞恥でひきつっている。

止めて、なんでこんな酷いことをするの！

私は溜まらず叫ぶ。

警備員はそれを鼻で笑い答えた。

お前の親父の脱走を機にここの秩序は崩れ去った。

それはつまり、私の友達は私の父親のせいで苦しんでいると言いつつとだ。

その言葉は私の心の何かを砕こうとして、乱入者によって防がれた。

どんな理由でもテメエがゲスなことに変わりはないだろうガツ！！

その乱入者は幼なじみのブッチだった。

ラッドローチが苦手が悪ぶっているけどヘタレで、でも優しい男。

ブッチは警備員をヘルメット越しに殴りつけて吹き飛ばし、マウン
トポジションを取ると警備員が気絶するまで殴りつけた。

私は人の汚さを知り、人の優しさを知った。

紆余曲折あり、無事に脱出した私は世界を旅し人の様々な顔を見た。
ウェイストランドの人達はみんな一生懸命で、みんなしっかりと生
きていた。

それが善であれ悪であれ、しっかりと生きていた。

その姿を見て私は生きていく事はきつと楽しいことなんだと思った。
踏みしめる大地の大きさを感じながら旅を続けて、ある日レイダー
に襲われて、そして彼に出会った。

私を手に入れた人。

私を助けてくれた人。

「じゃあ、報酬としてあんたを貰うぜ？」

下心もなくそんな台詞を吐くその人に、私は惹かれた。何か打算があっただろうがこちらを気遣う態度が見て取れたし、何より彼はスーパードミネーターとチームを組んでいた。益々惹かれて自ら彼の報酬となる。結果は大成功。

おいしいご飯が食べられた。

それも毎日。

彼、ケイトにはまだ秘密があり、私はもっとケイトのことを知りたくなる。

ドツボに嵌るとは正にこのことだろう。

今は彼の寝顔を見ている。

「う、やめろ、……ぶっ飛ばすぞお」

少し壓されていて、その子供っぽい寝顔に微笑ましい気持ちにされた。

ケイトが目を開ける。

今日も一日が始まる。

私はケイトに朝の挨拶を告げた。

「おはようございます旦那様。今日もいい天気ですよ？」

彼は寝ぼけながら私に挨拶を返した。

e p 3 (後書き)

因みに、メアリーさんの得意技は狙撃とスニーキングです。

ダン、ダン、ダン、ダン
発砲、発砲、発砲、発砲

激痛が体中を駆け巡る。

FEVウイルスにより強化された身体をどういう訳かその弾丸は容易く貫いた。

クソッ、なんて、化け物っ。

「無謀だったな小僧。他の奴らと同じだと思ったか？」

化け物は口角を吊り上げ悪魔じみた笑みを作り、スコープ付き44マグナムを俺の額に突き付けた。

奴こそはタロン社最強の男。

その隔絶した力故に仲間内ではこう呼ばれている。

至高のオーバーロード、と。

「……嫌な夢を見た」

夢才チだった。

朝。

机の上には修理した戦利品が新品同然に磨き上げられ輝きを放っている。

修理した際に手には入った予備パーツは仕訳して先日拾ったキャビネットの中へ格納する。

それにしても軍刀が手に入ったのはかなり嬉しい。

軍刀の切れ味はかなり良く重さも俺にとっては軽いくらいなので敵の群れに突っ込み相手の急所に滑らせるように使えばその威力を遺憾なく発揮するだろう。

「……ふう」

「あ、旦那様これどうですか？」

一息ついたところに声を掛けられそちらに目を向ける。

そこには改造したレイダーアーマーを着たメアリーがいた。

改造したレイダーアーマーはバッドランドタイプを元にして肌の露出を少なくしいつぞや手に入れたレザーアーマーを改造に使う事で防御力を強化している。

肌の露出は少ないのだが所々身体のラインが浮き出ているのでそこはかとなくエロい。

「ああ似合ってる。しかしそこはかたなくエロいな」
「……えう」

ありや真っ赤になっちった。

しかし親父さんはこんな可愛らしい娘さんを放っておいていったい何をしてるんだか。

「ついでだから色々渡しとくよ。武器の希望は？」

「あ、はい、えつと……」

メアリーから要望を聞き武器やその他諸々を用意する。

武器はメアリーが得意な戦法が狙撃とスニーキングと言っことからスナイパーライフルと消音機付き10?ピストル、近接戦用のコンバットナイフと各種グレネード及び地雷を4つずつ渡す。弾丸は三種の銃に合わせてそれぞれ百発分を渡す。

薬品はRAD-XとRADアウェイ、スティムパックを10個ずつ渡す。

余談だが俺達のチームは余り怪我をせずジェイソンが殴り込みで半数を殺すため弾薬も薬品も豊富に有ったりする。

バファウトも五十を越えたのでそろそろリトルランプライトへ行っても良い頃かもしれない。

「うん、丁度良いか。全員集合！」

それぞれの作業をしていたみんなを呼び今日の作業方針を伝える。

「今日はリトルランプライトへ遠出をする。付き添いはジヨナサンだ。ジェイソンは外で見回りしながらサソリと遊んでろ。クリフは道具の在庫管理と教会の掃除、戦闘の際には指揮を頼む。メアリー

は教会を改修する際に作った二階の吹きさらしで本でも読んで敵が来たところから狙撃をしてくれ、期待してるぞ?」

「はい、頑張ります!」

荷物をまとめ教会を出る。

装備は傭兵服グラントとゴーグルと中国軍軍刀。

ジヨナサンは中国軍アサルトライフルを装備し後を付いて来る。

空は晴れているが砂が宙を舞い、視界はとても悪かった。

リトルランプライト洞窟前。

ここにたどり着くまでにレイダーを始めとした様々な敵からかなりのアイテムをゲットしてピップボーイの中は宝箱状態になっていた。因みに俺のピップボーイの格納限界重量は550だったりする。

そのため食品やガラクタなどを捨てたりせずに旅を続けることができた。

戦利品の中には野生のスーパーミュータントからカツアゲしたミニガンなんてものがあり、これからの戦力増強に役立つだろう。

「ボス、こりゃいったい何ですか?」

「それはヌカ・コーラつつうウェイストランドで一番クールな飲物さ」

ジョナサンは先程手渡したヌカ・コーラを不思議そうに見ながら尋ねてきた。

ヌカ・コーラは美味しいのだが、基本野晒しにされているせいで温くなりその味わいを完全に発揮出来ない。

これは由々しき事態だ、聖堂に早く電気を引つ張つてきて冷蔵庫を置かなければなるまい。

冷蔵庫があれば水も冷やせるし生物も腐らせずにすむ。
優先順位の高い案件だな、うん。

などと今後のヌカ・コーラ事情に付いて考えながらリトルランププライト洞窟の入り口付近にある机に向かい戦利品を修理し始めた。

戦利品を修理していたらすっかり日が暮れてしまった。

ジョナサンは向かいの席で船をこいでいる。

それに苦笑しつつ辺りを見回した瞬間、俺の堪忍袋の尾が音をたててブチ切れた。

「……おい、静かに起きろジョナサン。騒いだり起きなかつたりしたら解体す^{バラ}」

「お、起きましたので勘弁を」

ジヨナサンが起きたことを確認すると俺は指示を出す。

「ジヨナサン、スニークングであいつらの後ろに回れ」

「あいつら、ガキを抱えてる奴らですかい？」

そう、見つけたのは奴隷商人。

こいつらはリトルランプライトへ潜入して子供たちを誘拐するところだったのだ。

「その通りだ。俺が会話して引きつけるから迅速に、且つ上手く回れ」

「ガキはどうします？」

「どつちも殺すな。ガキは助ける、奴らは俺が直々に殺す。……頭ねじ切って玩具にしてやるよオ！」

「了解、行動する」

獰猛な思考を抑制することなくそれを研ぎ澄ますようにして更に凶暴にしていく。

さあ、屑共。

地獄の底で後悔しやがれっ！！

Another side)

「新入り、認められたければ力を示せ」

「元よりそのつもりだわ。余計なお世話よ」

ネオヒューマノイド聖堂前。

ジェイソンとメアリーは互いに戦闘態勢をとっていた。

何故こうなったかと言えばそれは簡単である。

両者とも、互いが互いを気に入らなかったからだ。

チーム内で気に入らないことがあれば力を示し、それを認めさせる。

力こそ全て。

ウェイストランドの掟の一つに則り、両者は構える。

「始めっ！」

見届け人であるクリフの号令により両者は動く。

そして両者の影が重なった次の瞬間、勝敗は決まった。

「ガフツ!?!」

誰がこの結果を予測しえたのだろうか。

地に倒れ伏したのはジェイソンであった。

「勝者メアリー！」

「ぐっ、うお、なにをした？」

ジェイソンは腹を押さえながら呻き声で問いかける。

対してメアリーは軽く応えた。

「別に特別な事はしていないわ。ただ一瞬だけピップボーイの機能を使って脳のリミッターを外しただけよ」

お陰でこの様だけどね？

とメアリーは殴りつけた右腕をぶらぶらさせながら言う。

右腕は拳がつぶれ肘が衝撃に耐えられず砕け、筋肉はズタズタになり腕全体が自らの流す血で濡れていた。

「狂気の沙汰か」

クリフは一人呟き、そして自嘲する。

「……俺も同じ穴の貉、だな」

チームは狂人の集まりであった。

最強の人間。

それに付き従う常識の通じない狙撃手と知識を獲得したスーパーミュータント達。

愉快的なものだ、とクリフは夜空を見上げ呟いた。

「あゝ、効く」

メアリーは腕に先程貰ったばかりのスティムパックを刺し温泉に浸かる爺婆のように呻いていた。

eps (前書き)

色々やっちゃった感のある話。
強い敵がなんか好きなんだ。

「どこに行くつもりだよ？ テメエ等は」

俺はスニークキングでリトルランプライトから立ち去ろうとする奴隷商人の前に立ちふさがる。

奴隷商人の編成は五人。

二人が運搬で三人が戦闘の役割を果たしているらしい。

「何だ、テメエ」

「聞いてんのはこっちなンだよタコ。質問に質問で返すとかアホなことしやがって」

「アアツ！？ ふざけてんぞ」

じゃねえ、と言われる前にレーザーピストルを発砲。

レーザーは狙い通りに奴隷商人の男の頭に当たり、男の頭はその材質を瞬時に灰へ変化させてしまう。

詰まるところ、男は死んだ。

残り、四人。

「……討て」

「了解！」

重低音な声の男（恐らく奴隷商人のリーダー）の一声で隣の男が横に跳びながらアサルトライフルをこちらに連射する。

男の動きはこちらの動きを予測していたのか、二発撃ったレーザーピストルのレーザーを回避していた。

アサルトライフルの弾丸は俺に当たるがめり込む程度で傷は直ぐに塞がる。

「……化物か」

「どうします？ リーダー。あれとガチとか嫌っすよ、俺」

「……俺がやる。撤退しろ」

「了解、御武運を」

男は子供を抱えている二人とともに走り出し、リーダーと呼ばれた男は俺の前に立ちふさがる。

「どけよ、オッサン」

「この場において我は不動である。……通りたくば」

シヤランと音を立て、男は腰に差している二本の軍刀を抜き交差させるように構える。

威圧感。

山の如き気配を放ち不動を示す。

「その力を示すが良い」

本来は思っ存分闘うのだが今回は事情が違う。

俺は敵を殺し尽くすことにした。

「押して参る！！ テメエは辞世の句でも考えやがれ！！」

軍刀とコンバットナイフを手にし敵対を宣言する。

「その意気や良し！！」

敵は狂氣的な笑顔を浮かべて敵意を受け止めた。

〔 another side 〕

「おいおい、これは流石にネエだろうがよオ……」

攻撃担当の男は愚痴を呟く。

奴隷商人達の前に一つの巨大な影が立ちふさがる。

スーパーミュータント、ジヨナサン。

中国軍アサルトライフルを両の手に携え奴隷商人達を見据える。

「……血祭りだ」

中国軍アサルトライフルから複数の弾丸が放たれるが、男は動かない。

当たらないことを本能と長年の戦闘経験から悟ったからだ。

しかし、ならば何故このスーパーミュータントは撃つたのだろうか。威嚇と考え、一秒もせずに解答に辿り着く。

「痛え！」

「脚がア！」

呻き声。

スーパーミュータントが威嚇などするはずがないことを遅れて思い出す。

だが男は信じられなかった。

スーパーミュータントが脚を撃ち機動力を削ぐことなど考えていなかったのだ。

「ボスの命令だ、生け捕りにする」

「……けっ」

ジヨナサンが静かに言い放ち、男はその言葉に唾を吐く。

「黙って捕まると思っのかよ？」

「……黙んなくて良い」

両者は構え、警戒を高めていく。

油断が死を招く闘いになることを悟る。

男はその経験から。

ジヨナサンはその本能から。

「悲鳴を上げて泣き叫べ」

「ヤアルゼエー!!」

両者は呻き声をバックコーラスに戦いを始めた。

＼another side end＼

剣戟、剣戟、剣戟、剣戟、剣戟、剣戟、剣戟、剣戟、剣戟、剣戟。

打ち合うこと数十合。

見とれてしまうほど鮮やかに、手に汗握るほど刺激的に、唾を飲むほど蠱惑的に相手は撃ち込んでくる。

鮮やかで、刺激的で、蠱惑的な業の数々。

ステータス面で圧倒的に勝っているにも関わらず若干こちらが押されている。

相手は強くて、巧かった。

達人に達しているであろう男はこちらの力を捌き、受け流し、送り返す。

今切り結んでいる間にも相手からかなりのことを学んでいる。

「小僧、やるではないか」

「そりゃ、嫌みかよつ、クソオ！」

速く、速く、速く。

左手のコンバットナイフは目にも留まらぬ速さで相手を斬り伏せるはずなに、達人の男にはまるで届かない。

怒りなんぞとうの昔に碎け散っていた。

ヤバイよ、コイツッ！

能有る鷹は爪を隠すとかそんなレベルじゃ断じてないぞ、これは！

「粉っ!!」

「ぐっっ!!?」

右腕を浅く斬られる代わりに距離を離すことに成功する。

接近戦は通用しない。

コイツは弾丸すら何とかしそうで無駄に撃てない。

なら、畏だ。

「そらっ!!」

投擲。

男の一メートル前の地面にグレネードを投げつける。

男がグレネードの効果範囲を見計らい後ろに跳ぶのを確信しつつ、ピップボーイから10?ピストルを出しグレネードを撃ち抜く。

爆発音。

グレネードは弾け、爆発の衝撃で男の視界は遮られる。

その隙に、俺はありったけの畏をその場に設置した。

「……面妖な」

男は呟く。

まるでこの世の秘境を見たように。
確かにこの光景は絶景だろう。

「ものの数秒で地雷の海を作り出すとは」

煙が晴れる前の数秒の内にピップボーイに格納されているありったけの地雷を辺り一面に放り投げたのだから。

「オッサン」

「ぬ？」

「これであんたは弾丸を下に弾けなくなったな？」

「ぬう……」

地雷の爆発も目的の一つだが、本命は弾丸を下に弾いたときに起るであろう足下にある地雷の爆発への警戒だ。
これにより男は無茶な動きを出来なくなる。

「さあ、仕切り直しだ」

「……………く」

男は俺の言葉を聞いた後、

「くかかカカかかKAKAKAKA可化火かかKAKAKAKAカカカカカっ!!」

大きな笑い声を、天を貫けとばかりに上げた。

「良いぞ！ その賢しさ、実に良いぞ!!」

「……………気でも狂ったか」

「狂う？ おう、そうともよお！ 我のような人種は強敵との死合

を求める戦狂いだ!!」

「ッ!？」

有り得ない。

単純にそう思った。

その男は地雷の海を何の躊躇もなく駆けだしたのだ。

阿保かテメエ、そう叫びそうになった。

「阿保かテメエっ!」

実際叫んでいた。

アサルトライフルを出し男の進路上に有る地雷を一齐に撃ち抜き爆破するが、男はその爆風の中を突っ切ってくる。

業も技巧も何もなく、ただ子供のように此方へ駆けてくる男の姿に、俺は戦の狂気を見る。

そして、その狂気に対抗する手段を思考し、実行する。

「……………う」

詰まるところ、

「うるうああああああアアアアアアアアアアアあああああ
嗚呼っ!!」

俺も堪えきれずに狂った。

臃気に思い出す。

自分は今組み伏せているこの男を打ち破ったのだと。

男はその狂気故に技巧を鈍らせた。

鈍った業は俺の狂気と暴力を受けきれなかった。

ただ、ただそれだけの理由で俺はこの男に勝利したのだ。

虚しさが胸を満たす。

風が冷たく感じる。

切り結ぶ前はあるなにも煮えたぎっていたというのに。

知った途端一気に冷めてしまった。

こいつは遊んでいる子供そのままだったのだ。

勝って負けて相手より強くなるために練習。

その単純作業で達人の域に達した。

誰よりも純粹だからこそ辿りついてしまった。

辿りついてからはその強さ故に遊べる相手がいなくなり孤独に襲われ、だから俺との打ち合いは楽しかったのだろう。

気絶した男の顔は晴れやかだった。

「……なんか、もうどうでもいいや」

疲れた。

八つ裂きとか色々考えたけど今はただ休みたかった。

e p 6 (前書き)

ニューベガスを買ってしまった。
そこまでやる暇ないに。
次の更新は更に遅くなりそう。

「ボス、こいつらどうしますか？」

「なんか飽きたからそこらへんに捨てとけ」

「了解」

あの激戦の後、俺はジオナサンと合流していた。

ジオナサンは身体に沢山の傷を作っていたが、命に別状のある物は一つもなかった。

「…………と、その前に。オイお前！」

「うぐっ!？」

ジオナサンと闘ったであろう男の首を掴み持ち上げる。

「ユーロギーに伝えておけ。『次はテメエ等の巢を潰す』ってな」

「わ…………た」

「宜しい」

声が掠れていたが了解の意志が見て取れたので解放する。

その後俺とジオナサンは誘拐された子供たちを連れてランプライト洞窟へと入っていった。

↳ another side

その日、パラダイスフォールズに衝撃が迸る。

先にケイトが撃退した奴隷商人達はパラダイスフォールズにおいてその奴隷の捕獲率で一二を争い、また仕事をほぼ完璧にこなす事から仲間内でも評判の良いチームだった。

その評判の良いチームが壊滅して生き残りは一人。

だがそこまでなら良くある話だ。

ウェイストランドは玉石混交、ピンからキリまでの実力者達が自由に暮らす地だ。

そんなことも偶にはある。

問題は生き残りが遭遇した敵とそれを従える人間の情報。

スーパーミュータントを従える人間の存在感。

それこそがパラダイスフォールズの受けた電撃の正体だった。

「それは、本当なのか？」

「へい、ユーロジージさん。アイツはスーパーミュータントなんて比じゃ無いほどに強かったすけど」

「……………ビジネスだ」

「へっ？」

「ビジネスが出来るじゃないか！！」

ユーロジージが嬉しげに叫ぶ。

ビジネス。

つまるところ、ユーロジューは絶大な力を誇るそれらを利用し奴隷の捕獲数を大幅に上げようと考えているのだ。

捕まえた場合の報酬、売れた金額の分け前の割合などをその頭脳が瞬時に計測を始める。

「いや、まて。今の私達は彼らと敵対しているのだな。ならば利益についてを説明してこちらに味方した方が得だと考えさせる必要があるな……」

冗談じゃネエ。

奴隷商人の男は心の中でそう毒づく。

スーパーミュータントとそれを指揮する化け物の勧誘など正気の沙汰ではない。

ユーロジューは仕事狂いなのだと言は再認識した。

（side another end）

リトルランプライトは今お祭り騒ぎである。

帰ってきた俺が奴隷商人から家族を助け出し、足りない医薬品をかき集めて持って行き、さらにはスーパーミュータントまで子分に引っさげて来る様子が子供達の眼にはヒーローの様に映ったのだろう。

また、行き掛けに手に入れた食材なども歓迎される要因だろう。

育ち盛りの子供は沢山食わなきゃな。

しかし、真つ先にポテチとダンディアップルに群がるのはどうかと思う。

「ありがとうケイト、これで寝込んでる子達も楽になるわ！」

リトルランプライトの医療担当であるルーシーは俺の隣でヤオグアイの肉の串焼きを頬張りながら笑顔で言う。

その顔には嬉しさに混じり若干の疲れが見える。

俺が居なくなってから助手のパンブルと二人で頑張っていたのだと解ってしまう。

「偉いな、よく頑張ったよお前は」

ルーシーの栗色の髪を撫でる。

ルーシーは基本的に甘えない。

人の命に関わる役割についた時から、ルーシーは自分を律し判断力を向上させるために甘えを捨て精神だけ大人になった。

精神的に大人になったルーシーは他の皆と話が合わない。

半ば保護者的なポジションになるが大人だつて誰かに甘える時はあることを知らないルーシーはストレスを蓄積させていく。

そんな中でルーシーと話が出来るくらいに落ち着いている奴は前世の感覚を引きずって生きていた俺だけでよく話す中になっていた。その頃はルーシーには何か足りない程度 of 感覚だつたが今は違う。

ルーシーの精神は張り詰めた糸のようになっていたのだ。

話相手だつた俺にすら気を置いていたルーシー。

こいつは俺が居なくなつても誰かに甘えたりはしなかつただろう。だから、少しだけ年上らしいことをしよう。

子供の様に扱う事で張り詰めている糸を少しでも緩めようと思った。

「え、らい?」

「ああ、偉いな」

良い子、良い子。

ゆっくりと、労うように、安心出来るように、その栗色の髪を撫でつける。

「……そっか。でも、私は」

「当然の事をした、か? バカ言っな、子供が命に関わる仕事をする事が当然で溜まるか。お前は頑張ったよ。いや、むしろ頑張りがきだ。たまには、たまにでいいから誰かに甘えてくれ。じゃないとお前が壊れてしまいそうで怖い」

「心配してくれたんだ?」

「当たり前だ、俺達は……」

「うん、家族だもんね?」

「その通り、少しは年上に甘えとけ」

「……うん」

こちらにもたれ掛かるルーシーの頭を撫でながら考える。

……何とかしなきゃだめだよな、この状況。

くおまけ

その頃のメアリーさん。

「見つけたぞお!？」

「タロン社だあ!！」

メアリーさん達留守番組はタロン社の傭兵の襲撃を受けていた。
傭兵の数は十二。

タロン社の傭兵は皆錬度が高く、経験も豊富、さらに頭の螺子も数本吹っ飛んでいるためにウェイストランドでは最も関わり合いに成りたくない奴等である。

普段は三人で一セットの小隊を組んでいるがそれが今回は四セット。どうやら大きな仕事を終えた後のようだ。

「ジェイソン! 出れるか!？」

「む、無理だ、腹痛い」

ここでトラブル。

先の小競り合いにてジェイソンは戦闘不能。

メアリーは片腕がまだ治りきっていない。

「……万事休す、か」

「そうかしら? これくらい何とでも成るじゃない」

喋り掛けてきたのは腕にスティムパックを五本も刺しているメアリーだった。

「出来るのか?」

「ええ、二分ほどあなたが保たせられればね?」

「……解った、やるっ」

かくしてクリフは二分間もの間敵の攻撃を一身に受けることとなった。

……次回のオマケに続く。

く予告く

レーザーとか五ミリとかが飛び交う中、一人で車からひっ剥がし繋げて作った特製シールドで時間を稼ぐクリフ。
突如として鳴り響くスナイパーライフルの音計十発分。

「コード反転、裏コード『the Lord Of Gunner』」

彼女の言葉と共に光を放つピップボーイ。
その光は希望か、絶望か。

光の正体が知りたくば、各自、次なる説話を待て。

e p 7 (前書き)

最近文章がよく換れる。

疲れているのだろうか？

というわけで e p 7。

今回のネタは獣な某福音2です。

踊る。踊る。踊る。

5・56?の弾幕の真っ只中を走り、反らし、避ける。

十体のスーパーミュータントはこちらの動きに翻弄されて狙いが定まらない。

幕といえども的外れな所に張ったなら、それは障害にはなり得ない。狭い部屋の中を壁から壁へとスーパーボールのように飛びながら、腰に付けていた10?ピストルを抜いて撃つ。

タン、タン、タン。

発砲、発砲、発砲。

10?ピストルから放たれる三発の弾丸がスーパーミュータントのリーダー（以後リーダーと記載）の手の甲を打ち抜き、激痛のあまりリーダーがその手に持っていた中国軍アサルトライフルを取り落とす。

「グオツ!?!」

短い悲鳴。

それは相手に致命的な隙ができた証である。

跳躍、突撃。

即座に相手の頭上にある天井へと跳び、天井を床に見立て足場とし、相手の後方に瞬時に降りる。

「どこだ！？ どこにイルっ！！」

「後ろ後ろっ！」×複数。

こちらを見失った目標。

他のスーパーミュータント達はリーダーが近いため無闇に撃てない。

こちらの姿を捜すリーダーの脚を払い床に叩き付け、その後頭部に10?ピストルを突き付ける。

「お前等のリーダーは俺が押さえた。お前等の負けだ、軍門に下れ」

その日、俺はv a u l t 8 7のスーパーミュータント達を配下に加えた。

さて、何故v a u l t 8 7のスーパーミュータント達を攻撃したかと聞かれたら二つの目的があると俺は答える。

一つ目は奴隷商人達を追い払え、且つ人件費が掛からないという理由からリトルランプライトの警備としてスーパーミュータントをおうという目的。

二つ目はv a u l t 8 7にあるであろう医療機器を活用し医療関係を担当している子供達の負担を軽くしようという目的だ。

改造F E Vウイルスの影響か、俺は普通のウェイストランド人よりもスーパーミュータント達に話を聞いてもらえる。

そしてスーパーミュータントに戦術を与えた実例を間近で見ているから有効性は重々理解している。

これが上手くいけば子供達が奴隷にされることもなくなるだろう。

医療機器については医療担当の子供達に出来るだけ辛い思いをさせたくないからだ。

医療に携われれば携わる程、人の死を多く見ることになる。

その医療環境が劣悪にして、且つ患者が自分の家族に等しい存在ならば心に負うであろう傷の大きさは計り知れない。

その状況を変えるためにもこれはやらなければならぬ事だった。

懸念すべきは他の大きな勢力だろう。

代表はタロン・カンパニー、エンクレイヴ、そしてB・O・S（ブラザー・フード・オブ・ステイル）の三大勢力だ。

タロン社はテンペニーと繋がりを持てば何とか出来るだろうが、グールへの嫌悪ぶりを見る限り醜悪な容姿を持つスーパーミュータント達は門前払いだろう。

エンクレイヴは何よりその科学力が恐ろしいが、これはB・O・Sを上手く誘導して共倒れを狙うしかなさそうだ。

B・O・Sもエンクレイヴとぶつける方向で対策をとろう。

……やるが多すぎて目眩がする。

そして、この時点の俺はまだタロン社との敵対関係が取り返しの付かないところまで来ていることを知らなかった。

「で、何でアンタがここにいるのさ？」

「愚問。せつかく対等に渡り合える相手を見つけたのだ、生きているなら逃す手はなかるう？」

そして目眩に頭痛を追加する存在が目の前にいた。

おまけに質問に答えてないという不親切さ。

「質問に答えるよ、お前は気絶させた後で後ろ手に親指を医療用チユーブで拘束したはずだぞ？」

「なに、簡単な話だ。拘束された我に襲いかかったヤオグアイを蹴り殺しその牙で斬ったまでよ」

こいつ、俺よりも化け物っぽくないか？

熊吉を素の人間が蹴り殺すってありかよ？

頭痛が強くなる。

ついでとばかりに腹が痛くなる。

「さあ続きだ小僧、我を満たせ」

チャキと軍刀を構えてサアヤロウゼとばかりに餓えた獅子の如き眼でこちらを見つめる見た目ダンディなオッサン。

ところがこちらは先の戦闘で戦いはウンザリだ。

なので話し合いを試みることにした。

「まあ待てよオッサン。あんたにちょっと提案があるんだよ」

「いらん」

「そう言つなよ、これはあんたの渴きを潤すのに効果的な方法だと思つぜ？」

「何？」

興味は引けた。

後はどこまで引き込めるかだ。

くおまけく

その頃、不遇なクリフと女帝なメアリーさん。

「襲撃、継続つー!!」

「タロン社だあー!!」

聞こえる台詞のうち、およそ四分の一の確立でタロン社だあーとか叫んでるよあいつら、とクリフは飛んでくる弾丸を手に持つ巨大な盾で防ぎながら思う。

弾丸を防ぐための盾はジャンクヤードや廃墟から集めてきた鉄板などの廃棄部品を幾層にも重ねて作ったものだが、襲撃開始から五分も経つと投入してきたレーザー系の武装により繋ぎ目などが融解し、盾はその輪郭を崩し始めていた。

が、それよりもクリフを苦しめる要因があった。

「がっ、あっ、いいっ!？」

それは弾丸とレーザーにより加熱された盾そのものだった。

両の手のひらは焼けて皮膚が盾の持ち手とくっ付いている状態だった。

まだか。

クリフは心の中で悪態を付くも、苦しみながらもその手を離さない。それはクリフに生まれたプライドの問題だった。

新しく入ってきたメアリーはケイトに鍛えられたスーパーミュータントを傷を負ったとはいえ瞬殺したのだ。

ふざけた話だ、とクリフは思う。

他のスーパーミュータントとは違い知識を獲得し戦術を学んだということはクリフたちにとってアイデンティティであった。

誇りであったのだ。

それをポットでの人間の女に瞬殺された。

とても穏やかではいられなかった。

だが、だからこそクリフはそこにいた。

弾丸を弾く為の絶壁、その名道理の絶壁としてクリフは今一度誇りを得るために弾丸を防ぐ。

ふてくされているだけなんて格好悪いじゃないか、と心の中で叫びながら弾丸の雨を防ぐ。

「はやく、早く!」

着弾の振動がクリフの腕を痺れさせていく。
加熱された盾がクリフの手を焼く。

その力は信頼してやる、だから早くしろ。
限界の近いクリフがそう叫ぶ。

その思いが届いたのかどうかは定かではないが、それは間違いなく
そのタイミングで起きた現象だった。

銃声が響き渡る。

「……じゃ、いこうか？」

両腕にスナイパーライフルを持つとそう呟いた。

「『V・A・T・S』！！」

メアリーが言うとピップボーイが鈍く光り、周囲の膨大な情報をその頭に流し込む。

V・A・T・Sとは敵と自身との距離、自身の身体の状態、武器の性能から着弾する確立を算出し使用者の攻撃をサポートするピップボーイの機能である。

だがメアリーの使うピップボーイは他のものと少し毛色が違っていた。

「スナイパーライフル二丁ともなると流石に命中率が落ちるか。まあこんな無茶したら全体の情報取得も本来はままならないけどね…

…」

メアリーのピップボーイは敵への命中率の表示だけではなく、スナイパーライフルで狙える距離にいる全ての敵を狙うという暴挙に出ていたのだ。

これはメアリーがウエイストランドを渡りながら改造した機能の一つだった。

ウエイストランドの敵は大抵集団で襲ってくる。

だが狙撃が戦闘の基本スタイルであるメアリーは忍び寄り襲ってくる存在まで気が回せない。

ならば周りの敵の情報を常に頭の中に流せば良いとばかりに改造を施す。

その名もpip-boy・COMBAT。

それは戦闘に深く対応したピップボーイにふさわしい名であった。

「頭部の命中確立はギリギリ10パーセントか、きついかな？ …

…しょうがないか、これやると後で頭痛が酷いから嫌なんだけどなあ」

ぼやき、深呼吸をして戦場を見つめる。

「メアリー・ダウンボルトのパーソナルを入力」

それは改造ピップボーイの中においてなお危険な使い道。
ロボブレインの技術を流用し自分の脳を限定時間のみ生体ハードウェアとして使用する狂気の技術。

「コード反転、裏コード『the Lord Of Gunner』」

ピップボーイが赤色の光を放つと同時にメアリーの視界が敵対勢力を除いて赤く染まる。

「総合命中率70パーセント、じゃあ兵士諸君、首を置いて地獄へ落ちろ」

銃声が五度響き渡る。

だが放たれた弾丸は十発。

それらは引き寄せられるかのように十二人中十人のタロン社の傭兵の頭蓋を打ち抜いた。

「うっ！？ ……頭、痛い。けど、褒めてくれるよね？ 旦那様」

頭蓋骨を内側からハンマーで叩かれたかのような痛みがメアリーを襲う。

ガランと、両の手からスナイパーライフルが零れ落ちる。

脂汗を流し、目尻に涙を湛えながら曇る夜空を見てメアリーはそう
呟いた。

踏み込みが甘い、重心がぶれてる、まだおやつは早いなどの怒号が狭い洞窟の中に反響し、それは音波攻撃となりリトルランプライト在住の犬達を襲う。

無論、音波攻撃は俺に対してもかなりのダメージを与えていた。臭覚や聴覚に代表される五感強化された為に激臭や大音量などによるダメージを受けるように成っていたのだ。

「おい、もう少し静かに出来ないのか？」
「すまんが出来ぬ。興奮してつい力が入ってしまっ」

この一見ダンディな男は今、リトルランプライトの子供達に近接戦闘の指導をしている。

何故こいつがそんなことをしているかと言えば、それは俺がそうするようにし向けたからだったりする。

お前の渴きを潤すならお前と同等の存在を育て上げ、その上で向上心を忘れないように教育し理想的な競争相手を作れば良い等と発言したばかりに今こいつは鬼軍曹として覚醒していた。

「……やりすぎるなよ、相手はまだ子供なんだからな」
「次は我が直々に相手をする！」
「Listen！（聞けよ！）」
「No！（御免被る！）」

鬼軍曹は死体擬きを量産していく。

しかし成果は出ている。
近接教育課程に当てられた子供達はその技能を驚くほどに伸ばし、五人で組んだチームがジョナサンと渡り合うまでになっていた。これに隠密技能を教えたら良い具合にスーパーソルジャー化しそうで少し楽しみでもある。

「心意気は!?!」

「死ぬ前に殺せ!　死ぬ前に殺せ!!!」

「よし!」

……よしじゃねえよ馬鹿。

「ルーシー、医療器械の調子は?」

「最高、これのお陰で大分楽になったわ」

「お兄ちゃん、私も頑張った!」

「そうか、パンプルも偉いぞお!」

ルーシーと医療器械について話しているとリトルランプライトの最年少ことパンプルがすり寄ってきたのでその頭を撫でる。

「えへへ」

嬉しそうに笑うパンブルに癒やされ、頭を撫でながらもルーシーと会話を続ける。

「所で、あれはどうだった？」

「っ、うん、アレは凄かった。コレはひよっとするかもしれない」

ルーシーの言うアレとは俺の血液である。

この身体を強化している物質が常に血液中に流れていると思った俺はルーシーに検査を依頼した。

結果はビンゴ。

血清を犬に注射する実験を試みたところ、大変なことに成ったそう
だ。

ルーシー曰く、「犬が人に成った」とか。

……なんじゃそら。

「おい、おいおいルーシーさん、からかいはいけないなあ。つーか
漫画の読みすぎだ」

「ほ、本当に本当だよ！ ほら、リリーおいで？」

と言われて物影から現れた存在に目を疑った。

有り体に言えば、それは犬耳少女だった。

「はじめまして、お父様」

犬耳少女、リリーはスカートをつまみ上品なお辞儀をする。

髪の色は燻し銀のような色、目尻が鋭くその笑顔は見た者に冷たさ
を感じさせることだろう。

てか、お父様？

「あ、ほら、ケイトの血清でこうなったからそうなるかなあと」

「おい、この年で一児の父とかって……」

「手間は掛けません。必ずやお父様のお役に立ちます」

真剣な眼差しでこちらを見つめるリリー。

一見すると睨んでいる様にも見えるその眼に映る感情は不安。

一体全体何がそこまで不安なのかは俺の知るところではないが、見ていて気分の良いものではないのも確かだ。

「……お前には何が出来る？」

「！、はいっ、敵や弾薬等の探索、狩りや戦闘にも自信があります
！」

我が意を得たりと話し始めるリリーの情報を吟味する。

探索は、……ああ鼻か。

狩りや戦闘とは言うが身体の規格が違う今、実戦に出せるかが解らない。

いや、俺の血清を投与したのだから見た目通りの身体能力とは限らないか。

だとしてもどれ程出来るか解らない今は実戦はやめた方が良いな。
なら、うん、決めた。

「近接戦闘課程の奴らと一緒に訓練してる。期限は一ヶ月、また俺が来るときに使えるように成ってたら連れて行ってやる」

「はい、頑張ります！」

元気に言うリリーの頭をパンブルを撫でる手と逆の手で撫でる。
それをルーシーは呆れた目で見ている。

「そうやってアナタの周りには女の子が増えるのよねえ」

「人聞きの悪いことを言うな、ただ女性と仲良くしただけだろうが」

といった言い合いを俺達は三十分以上も続けた。

おまけ

くぶつちぎりブツちくん

その男は全てを圧倒していた。

頑丈な体躯を堅牢なメタルアーマーで包み込み、巣に入ってきた敵を迎撃しようと次々に襲いかかるレイダーをその腕に抱えるミサイルランチャーで時には撃ち、時には殴りながら着実にレイダーの巣を制圧していった。

至高のオーバーロード、ジャブスコはその日己の腕が鈍らないように狩りをする事で自己を鍛えようとしていた。
狩りである。

ジャブスコはその隔絶した力故にレイダーを獲物としか捉えていな

かった。

それはレイダーだけではなくウエイストランドにいる大抵の者に言えることだった。

だが、今回は例外がいた。

「又ウツ!？」

殺気を感じ身を翻すジャブスコ。

それと同時に銃声が三発鳴る。

ジャブスコは銃弾を避ける事に成功する。

だがその数瞬後にジャブスコは背中に衝撃を受けた。

「コレは、陶器片だと? ……そうか、そういうことが。成る程、良い戦術だ」

ジャブスコはメタルアーマーに軽微の損傷を与えた陶器片からその戦術を理解する。

それは食器を爆発物が爆発する際の衝撃と爆風で鋭利な破片にして広範囲を攻撃するといったものだった。

「だが銃声がお前の居所を伝えている、減点モノだな」

先程銃声が聞こえた方向へジャブスコは足を進める。

ガシャンッ

「又グツ!？」

しかしその足はベアトラップによってすぐに止まる。

タン、タン、タン。
銃声、銃声、銃声。

三発分の銃声の後、ジャブスコの足下が爆裂する。

なんて事はない。

ただ単にフラググレネードを相手に見えないようにベアトラップの付近三カ所に埋め、機を見てそれを撃ち抜いただけだ。

だがそれに必要とする射撃能力は高いレベルのモノを要求されるのもまた事実。

つまりジャブスコの敵は、未だに顔を見せないその敵は針に糸を通す要領で敵を撃ち抜く射撃の名人だった。

「……脚が一本イカレたか、面白い」

心底楽しそうに笑うジャブスコ。

それを見て敵の男はげんなりとしていた。

「勘弁しろよ、おい。んだよあのアーマーは、まるで効いてねエジヤンかよ」

暗闇の中で10?ピストルに付けたスコープを覗きながら男、ブッチは毒づき、何故自分がこんな事しているのかをふと考えた。

原因は幼馴染の父親。

彼が脱走したことにより惨劇は始まった。

秩序の崩壊した vault 101 を駆け回り幼馴染を一人助けた。そして自分の愛した母親はラッドローチに食い殺された。

幼馴染を助けた事を後悔しているのではなく、ただもう少し上手く出来たのではないかという自責の念だけが堆積したブッチはもう一人の幼馴染、アマタに貰った10mmピストルを片手にウエイストランドを三日歩いた。

その三日間でブッチは三つのレイダーグループ、少なくとも十五人を殺傷していた。

生き延びたい一心で引き金を引いていた。

何も解らぬままの死に納得せず、人を殺しその肉を喰らおうとも生き延びた。

その後も手頃な生き物を善悪問わず、ただ生き抜く為に殺していた。

いつしかブッチはレイダーのグループを率いるようになっていた。皆ブッチの必死に生きるその姿に惹かれたのだ。

奪うだけではない、犯すだけではない、殺すだけではない、ただ純粹に生きる為に。

憧れだった、太陽だった。

そんな仲間たちにブッチも心を開いていくが心のどこかでこれで良いのか自問自答を繰り返すようになった。

まるで自分を責めるように。

そして仲間たちは一人の男の手で死んだ。
だが憎いとは思わない。

「何故？」

自問。

「何故だ？」

自問。

「……ああ、そういうことがヨ」

自答。

答えに至る。

それは単純に容量の問題だった。

母親が死んだ、酒に溺れてはいたが自分の最愛の人だ。
憎くないはずがない。

なら原因は？

母を殺した元凶は？

ラッドローチか？

いや、違う。

幼馴染のメアリーか？

それも違つ。

それなら自分か？

全然違つ。

あいつだ。

メアリーの父親。

アイツだ。

友達の父親。

アイツだ！

オレノ、カタキー！！

容量の問題。

ブッチの中にある憎悪、その全てをメアリーの父親ことジエームズが独占していたのだ。

故にブッチの心はある例外を除いて人を憎まない。憎めない。気付いたら後は速かつた。

「こんなところで、燻ってられっかってんだヨオ！！！」

ピップボーイからミニガンを取り出し、構える。

その時、ミニガンのスイッチを押し込もうとした正にその刹那、ジヤブスコとブッチは眼を合わせた。

両者の間で交わされた視線は共感。

互いに一つの物事へと執着するその在り方に共感を覚えた。

「……………連れて行ってくれるんだろう？」

「……………ああ、勿論だとも。歓迎しよう」

ようこそ、タロン社へ。

その後、二人は洞窟を出てバニスター砦へと向かった。

洞窟にはブツチの仲間だった者達の死体とアマタから貰った10m mピストルが無造作に転がっていた。

e p 9 (前書き)

遅くなりました。

クオリティも低いです。

フォークスたんが何か微妙です。

それではどうぞ。

ウェイストランドを歩く。

リトルランプライトを出た俺は拠点へ帰る途中にそいつと出会った。

「正義とは、何だ？」

知るかボケ。

俺とジョナサンは考える人のポーズを取りながら正義について思考する奇妙なスーパーミュータントを素通りする。

通り過ぎ、ふと振り返るとそいつはこちらを驚愕の顔で見ている。見て、こちらに走ってきた。

砂煙を上げながら。

「ま、待ってくれ！」

待てと言われて待ってみれば、目の前には数秒前まで考える人ごっこをやっていたスーパーミュータントが息を切らせていた。

「何か用？」

「お前、無事だったのか？」

「どっかであつたっけ？ 俺とあんた」

話を聞いてみると、このスーパーミュータントは他のスーパーミュータントに煙たがられて vault 87 に軟禁状態だったのだが、先日の襲撃でケンタウロス達を始末（ケンタウロスは他の人間を見境なく襲うため危険と思い、サンプル用の数体以外は全て殺傷したのだ）した際に一斉にロックを解除したので、それで出てきたのだろう。

聞けばスーパーミュータントに連行される前の俺を見かけたのだが
助けられなくてそれを思い悩んでいたそうなお優しいことだ。

「へえ、思考形態が人間に近いのか。……いや、それ以上かもしれないな」

「あの子供が無事で良かったよ。しかもスーパーミュータントを従えているとは驚いた」

「俺達もまさか失敗作の瓶からボスみたいな化け物が生まれるとは思わなかったよ」

ハハハ、と笑いの輪が広がる。

しかし、面子が化け物だけとは何とも不思議な光景だ。

「ところであんたの名前は？」

「ん？ ああ、フォークスでも呼んでくれ」

……待て。頼むから待て。

こいつがフォークス？ レーザーデスマシン、みんなの嫁なフォークスたん？ カルマが善に傾いてないと仲間に出れない奴？

「どうした？」

「いや、なんでもない」

動揺してしまった。

文字通りの化け物がウェイストランドに解放された。
はつきりと言えることは、ウェイストランドのパワーバランスが大きく変わることだ。

「ところで、フォークスはこんな所で何してるのさ？」

「正義について思いを馳せていた」

係わり合いに成りたくなってきた。

「そうかい。でこれからどうすんだ？」

「……これからか、そうだなあ。取りあえず困っている人を助けながら旅をしようと思う」

「そうか。……うん、いいんじゃないか？ 悪くはないだろうさ」

「ありがとう、本音じゃなくても嬉しいよ」

「饑別だ、生き残れよ？」

ピップボーイからガトリングレーザーを取り出しフォークスに渡す。ちなみにこのガトリングレーザーは道端で気絶していたB・O・Sのアウトキャストから頂戴したもので、その後センサーモジュールやコンダクターなどの部品を換えて修理したものである。

改良などは施していないが廃棄部品の中から頑丈且つ使える物を厳選した為それなりに長持ちするだろう。

「これは、……ありがとう、友情の証として大切に使用してもらおうよ」

何か感激したようにフォークスは笑顔を浮かべた。

しかしミュータント面での笑顔の怖いこと恐いこと、子供が逃げるどころか大人も腰を抜かすことだろう。

というか、あれ？

友情？

俺のカルマは低いはずだが、そこら辺はやっぱりゲームとは違うの
だろう。

「それじゃ、俺達は行くよ」

「達者でな、ヒーロー」

「あ、待ってくれ」

さあ行こうというときにフォークスに呼び止められる。

「……非常に失礼な質問だと思うのだが、その、そんな装備で大丈夫か？」

聞かれて自分の装備を見直す。

傭兵服・クルーザーに中国軍軍刀。

確かにウエイストランドを歩き回る上では些か心許ない装備だろう。そんな奴がガトリング・レーザーなんて渡せば不安にもなるか、本当に優しいのだろう。

「ああ、大丈夫だ。問題ない」

だから応えよう、俺にはこれで充分だと。

「これだけあれば充分だし、他の武器や防具はピップボーイに入ってるしな」

「そうか、安心した」

「じゃあな」

「ああ、またどこかで……」

そう言っただけ俺達は別れた。

次に逢うときは敵か味方が解らないが、必ず一悶着ある気がする。

「良いんですかい？ ボス。あいつの行動原理はウエイストランドには絶対合わないと思うんですが……」

聖堂に向かう道でジョナサンが言う。

その通り。

フォークスのカルマは善に傾き、自ら前に進んで戦う様は勇敢な戦士である。

姿形を除けば理想的な英雄と言っても過言ではないだろう。

だが、だからこそ欲望の坩堝と化したウエイストランドでその姿はいつそう強く異端の輝きを放つ。

「そう、だな。いや、だからこそ期待しているんだろうな。……こういう奴が世界を変えるんじゃないかってさ」

淡い希望、とでも言えば良いのか。

何だかんだ言いつつ結局は平穩を望んでいるのだろう。平穩な世界で生きてきた記憶が思い出した後の記憶に影響を与えたことは間違いない。

「俺は、そう簡単には変わるとは思えませんがね？」

「そりゃ簡単には変わらないさ。だが、見てみたくないか？ 平穩な世界」

その言葉にジヨナサンは微妙な顔をする。

ジヨナサンは現状に満足していた。

そもそも、ウエイストランドに生まれた者は基本的に平穩を考えることはない。

何故なら鬭争こそがウエイストランドの日常だからだ。

「平穩の価値を理解することが出来ません。けど、ボスがそこまで言うのならそれには価値があるんでしょう」

「そうとは限らんけど、でも……」

沈み始めた太陽に手を翳す。

「それが尊いものだった気がするんだ。だから、少しだけ憧れた」

「……そうですかい」

「そうだよ。さ、そろそろ見えてきた」

聖堂が見えてくる。

聖堂は夕日に照らされ長い影を作り出す。

その影の形が黒い化け物に見えて、俺達にぴったりだと思った。

ep10 (前書き)

久しぶりに更新。

遅れてきた夏休みに乾杯。

今回からメガトン 地下鉄探索へとつなげていこうと思います。

しかし、話を作ろうとすると大好きなライダーが出せない。

何かこう、番外編でも作ろうかと思う今日この頃。

「……これでいいか？」

「良い腕してるわね、私でもこう上手くは治せないわ！」

「なら約束どおり例の件考えておいてくれよ？」

「当然ね、むしろこっちが頭を下げたいくらいよ！ 修理用パーツとリロードベンチとガンパウダーを取り寄せるからこの近辺によつたら私に話しかけて確認してね！」

爆弾の街、メガトン。

飛行機などの瓦礫を利用して作られたであろうこの街はきれいな水を手に入れられることで有名だが、外から入植してくる人には有料でありそれなりに値も張る。

一端この街の住人になってしまえばソレも関係ないが既存のコミュニティはコミュニティ外の者を受け入れずらく、またそれが生活にかかわる水に関わる数の新参者ともなると外来人嫌いにも拍車がかかるというものだ。

故に街の住人と入植者の間の関係は悪く、時が経つにつれてその関係は悪化していく。

では、そんな街の住人になるにはどうすればよいか？

答えは簡単だ。

自分が有益な存在であることをアピールすれば良いのだ。

Faillooutsのなかでメガトンに住めるようになる条件は広場にある不発弾を爆発しないようにすることだった。

プレイヤーはその功績を認められて住民権を獲得するわけだが、俺の場合は少し違った。

この街に着いた俺はまず商品を売るためにモイラの雑貨店を探した。

商品とは自分で修理した武器や防具などだがそれが店員の目に留まり店の商品をメンテナンスすることになった。当然タダではない。常々思っていたことなのだが、銃に使う弾丸を強化したいと俺は考えていた。また、弾丸の供給を安定させるためにもガンパウダーとプレス機の存在は必要不可欠だった。なので今回のメンテナンスの報酬として、それらを商人の繋がりから手に入れてほしいと頼んだのだ。

「それにしても貴方も変わった人ね、銃弾を自分で作るだなんて」「むしろ考え付かないほうが可笑しいだろ。弾丸の数は戦いにおいて生存率の高さに直結する。それが安定して供給されるとなれば手に入れたくなるのが人間ってもんだらう?」

「それはそうだけど、でもウエイストランドで弾丸を自作できる人なんて限られてくるわ。あ、けど人から奪わずに自分で作るって発想には良いと思う。略奪なんて野蛮なもの」

「まあ襲ってきたら身包み剥ぐけどさ」

なんてことを話しながら雑貨店を出た。

そして、現在俺は与えられたメガトンの自室にいる。

雑貨店を出た後リスチューを頬張っていた俺のところに来たカウボーイ風のオッサンに頼まれて不発弾を解除したら与えられたものだった。

なんでもこのおっさん、モイラの店に武器をメンテナンスしてもらうために訪れて上機嫌なモイラから俺の腕を聞いたらしい。

そんなこんなで与えられた自室だが、有効に活用させてもらうこととした。

拠点は幾ら有っても困らないし、何より冷えたヌカ・コーラが飲めるなんて最高だ。

「お飲み物を用意致しましょうか?」

「もう飲んでるよ」

しかしこのロボットは何かと五月蠅いのが玉に瑕だ。

部屋の掃除や整理などを自動でやってくれるもは助かるのだが何時も階段で立ち往生してるは部屋のドアに挟まっているはと何かと邪魔なのだ。

いつその事戦闘用に改造してしまおうか。

そんなことを考えながら空になったシヨットグラスにヌカ・コーラを注いだ。

「その人、ヌカ・コーラ十四本お願い」

「うわあっ!?!、って、その人? 俺のことか?」

「? お前以外に誰がいるのさ?」

「い、いや、俺はグールだからよ? まともに受け答えしてくれるヤツが少なくてさ」

モリアーティの酒場。

せっかくメガトンに来たのだからメアリーの父親についての情報を集めようとした酒場でグールの店員とであった。

何故情報が欲しい当人であるメアリーが居ないかといえば、激しい頭痛に現在進行形で襲われているからだ。

頭痛の原因は解っているらしく持病のようなものだから放っておいて欲しいと言った後、代わりに情報を集めてくれと頼まれた。

ソレぐらいはお安い御用だと引き受けて現在に至る。

「それは災難だったな。メガトンは住みやすいか？」

「……いや、覚悟はしていたけど偏見や差別つてのはなくならないんだよ。けどあんたみたいに俺達グールを理解してくれる奴もいるからスムーズスキン全体を嫌いにはなれないがな。はつきりと言ってしまえば住みにくいけど、それでもきれいな水が貰えるだけましさ。差別から逃げられないならどこにいても同じだし、暫くはここにいろよ」

「そうか。……ところで、こちら辺で Vault 101 のジャンプスーツを着た奴を見なかったか？」

「Vault 101？ いや見てないけど。街のことならモリアーティーの野郎に聞けばいいと思うぞ。ほい、ヌカ・コーラ」

「サンキュー、解った、聞いてみるよ。今どこにいるか解る？」

「たぶん外を見て回っているだろうな。メガトンは狭いから直ぐに見つかるさ」

「把握した。じゃあな、またくるよ」

「またな！」

酒場を後にする。

グールの店員はメアリーの父親の情報以外にもいろいろと教えてくれた。

ピップ・ボーイの示す時刻は既に二十三時を回っていた。

この時間帯に人と会話する気にはなれない俺は一先ず自室へと戻る。ヌカ・コーラは確保したので二三日ここに滞在するのも悪くはないが、明日情報を得たら直ぐに帰ろう。

カンカンと金属で出来た即席の地面が靴とぶつかり甲高い音をたてる。まるで楽器のように小気味の良いその音は月の妖艶な輝きと合わさり俺の心をウキウキさせる。

カンカン

カンカン、カン

「……おい、出て来いよクソ共。せつかく良い気分には浸っていただけなのに、無粋だろ？　こういうのはさ」

しかし無粋な奴らとはどこにでもいるらしい。文字通り人外レベルの聴力はそいつらの足音を捕らえていた。数は三人。

気配を消していたことから暗殺者の類だと予測しながら身体を半身に構え振り返る。

左肩を晒し右肩を隠すその構えでピップ・ボーイからコンバットナイフを出して身体の影で握る。

「……驚いた、何故解った？」

「耳が良いんだよ、後天的な異常だけど」

物陰から出てきたのは三人の男。

黒いコンバットアーマーを纏い、それぞれ先頭の男がスコープ付き44マグナムを持ち後方の二人がレーザーライフルの照準を此方へ向けている。

「黒いコンバットアーマー。……タロン社か？」
「違う」

断言。

明確に違つと告げた男はニヤついた口元を隠そうともせず言い放つ。

「あんな品性の欠片すら持たない奴らと一括りにするな。我らはデ
ンペニー直属の暗殺部隊よ」

「……顔を晒した暗殺部隊についてどう思う？ 率直な意見を聞か
せてくれ」

「……今回は特殊ケースということだ」

ジン

光線

「次は当てる。妙な気は起こすな」

隙が出来たと思いつきに一步踏み出してみれば後方の男がレーザー
ライフルを打ち込んでいた。
成る程、隙がない。

前の男が隙を見せたのは罠で相手が攻勢に出ようとした瞬間を後ろ
の二人が狙い打つ。

やるのが玄人じみていることからおそらくは熟練のチームだと判
断できる。

はてさて、どうしたものか。

「用件は？」

「何？」

「用件はって聞いたんだよ。正直なところあんた達から逃げ切るの

は現状骨が折れそうだし、考える時間が欲しいんだよ」

「まあいい、俺達部隊の目的を話したところで任務の結果は変わらない」

こちらの不利をアピールすると得意げに口元を歪ませる男。
正直イラつく。

「俺達の目的はな、お前を捕虜にして」

ああ、イラつく要因は何もその特徴的な口元だけじゃなくて、

「化け物共を誘き寄せて殺すのさ」

こいつらが俺を下に見ていることにイラついているんだ。

「……馬鹿だな、お前ら」

「アン？」

「馬鹿だって言ってるんだよ馬鹿が。何だ？ お馬鹿さん達は耳の機能まで馬鹿になったのかい？」

イライラする。

この世界で綺麗なものの代表である月の下で行う月光浴を邪魔するに留まらず、こいつらは俺の仲間を殺すなどと発言しやがった。
ふざけやがって。

「ふん、安い挑発だな。乗るとでも？」

「挑発云々は割りとおたつているが、基本的にお前達が馬鹿だって言うことは決定的事実だ」

「その理由は？」

「理由、ねえ……」

こいつらはまだ解らないと言っのだらうか。

ここが街中だということに。

「！！」

「やっと気付いたか、そりゃそうだ。いくら夜といってもここは街だぞ？ 人の目が完全になくなることなんてないに等しい。そんなことにも気付かなかったのか？ 転職を勧めるよ、当然ながら隠密系以外でな」

人、人、人。

数十人の人間がそれぞれ手に何らかの火気を持ちこちらを観察している。

こいつらは街中で銃を出すべきではなかった。

「……隊長、どうします？ 完全に包囲されているようですが……」

その内心は穏やかではないだろう。
今度は俺の口元がニヤ付き始める。

「で、どうするのさ？」

「……どうもこうも」

面倒くさそうに男は居並ぶ人の群れへと銃口を向けて、

「殺すだけだが？」

引き金を引いた。

啞然、という言葉はこういうときに使うのだろう。

男にとつて戦力差は十倍を越すはずだ。

にも関わらずこの男は億劫そうにだが迷わず引き金を引いた。感性を疑う。

「なっ!？」

「引くぞ、撤退方法のケース35、『金属製構造物の利用』に当てはめて行動を開始。構造物をレーザーで溶解し逃走経路を作成しろ!」

ジン、ジン

光線、光線

ダン、ダン、ダン

発砲、発砲、発砲

後方の二人が床を支える留め具の部分に照射し床を崩す。

その間、先頭の男がライフルを持っていた住人に44マグナム弾を容赦なく打ち込み無力化する。

やがて盛大な音をたてて崩れ、男達は下の階へと着地する。

床の崩壊に巻き込まれて住人の何人かが行動不能状態に陥り、男達は崩壊により生じた粉塵に紛れてその姿を消していた。

「……馬鹿じゃなくてタダのイカレ野郎だったか」

辺りはまだ騒然としている。

見物していた奴から殺してモノを掠め取るうとした連中まで様々な性格の奴らが大勢負傷した。

こちら目掛けて走ってくるカウボーイ風のオッサンを見て、事情聴

取で朝まで眠れないかもしれない可能性を視野に入れて溜息を漏らした。

ep10 (後書き)

更新が遅れた理由は課題が終わらないことだけではなく、ととモノ3にはまっしてしまい物語構成とととモノ妄想がごちゃ混ぜになり作り直しに時間がかかったからという情けない理由があったりする。

ゴメンナサイ。

e p 1 1 (前書き)

更新です。

一月のうちに二回目の更新とか久しぶりの経験でした。

トンテンカン、トンテンカン

「……お、終わった。さあ、六時間という有るんだか無いんだか曖昧な時間間隔で改造を施したこの家政婦ロボットMr・ハンディー改めMr・ブラウニーによるメガトンの修理をとっこした改修をソノ眼に焼き付けやがれこのグミンドモオオ!!!」

メガトンのとある一軒家から上がる声は、叫びというよりも遠吠えに近かった。

グチャグチャになってしまったメガトンの道という道を「命を狙われていたお前が居たからこうなった、責任取れ」と言われて修復しなければならなくなったケイトは自分一人では遠くないうちに限界が来ると悟り丁度家にいたMr・ハンディーを修理及びメンテナンスに特化した性能へと改造していた。

六時間かけて新しく生まれ変わったメンテナンスロボット、通称Mr・ブラウニーはストレスと睡魔のツープラトン攻撃によりベッドへと倒れ伏したケイトの入力した通りに早速修復作業を改修した。

その結果を端的に表す言葉が数日後のメガトンで流行語となる。

曰く、

「ブラウニーが一晩でやってくれました」と。

「……と、言うわけで次の情報源は都市部にあるそうだ」
「D・Cですか」

大聖堂に帰ってきた俺はメアリーの親父について得た情報を話した。モリアーティによれば、メアリーの親父は一度メガトンに立ち寄りD・Cにあるギャラクシー・ニュース・ラジオ（通称G・N・R）の本拠地があるビルへと向かったらしい。目標へ着実に近づいている現在の状況は順調と言えるが、問題が一つあった。

それは誰もD・Cへ行つたことがないのだ。

「D・Cってなんだあ？」

「確か繰り返し返して意味だつたと思うぞお？」

「成るほどお、解らん」

スーパーミュータント組みではクリフが正しいようで間違っている知識を披露していた。

どこのギャルゲだよ、まったく。

「で、どうする？ D・Cに行くなら地下鉄を通って行かないといけないし、そんな狭い所を大勢で行くのは嫌だぜ？ 行くなら一人か二人だろうな」

「……今回、私は一人でD・Cを探索してみたいと思います」

ソノ言葉に少し驚くと共に、立場的に考えればメアリーは俺の従者であり従者の用事を手伝う主はいない

だろうと考えその返答に納得した。

「戻って来るんだよね？」

「はい、用事が終わり次第ここへ戻ってきます」

「……ならいいや、武器やアーマーは好きなものを持って行け」

「ありがとうございます」

少し寂しい気もするが今回は別行動をとらなければいけない理由がある。

その理由とは来るエンクレイブとの戦いに向けてスーパーミュータント用のアーマーを作る計画を実行に移すためだ。

通常のスーパーミュータントでも一般的なウエイストランド人の三倍の力と体力を持つが、フォークスと比較した場合その性能は霞んで見えてしまう。

そしてパワーアーマーに身を包み光学兵器をその腕に持つエンクレイブやB・O・Sの連中は一人一人がスーパーミュータントと戦って打ち勝つことができ、同数同士ならば連携と戦術にてスーパーミュータントを上回るだろう。

しかし、スーパーミュータントにもアーマーを着せ防御力を底上げすればスーパーミュータントの戦闘継続時間は上方へと大幅に跳ね上がり、そこに戦術を加えた場合基本性能の差でパワーアーマーの集団を圧倒することだろう。

だがアーマーを作成するには資材が必要であり、幾ら知識があったとしても一人で作成するには時間や体力の面から限界が来るのは明白である。

故にこの計画をカンタベリー・ commonsへ持ち込み作成を手伝ってもらおうと考えた。

対価としてこちらが提供できるのは訓練されたスーパーミュータントの護衛と整備技術である。

スーパーミュータントはランプライトで警護を行っている者の中から実績のあるものを選別し商人それぞれの護衛に付かせる。

ちなみに警護のスーパーミュータント、通称スーパーミュータント・ガーディアンはスーパーミュータントの身体がすっぽり隠れてしまふほど巨大で堅牢な盾とアサルトライフル、グレネード五つとパルス・グレネード三つを基本装備としており障害物の無い荒野でも警護対象の隠れる場所を確保し戦闘を行うことが可能である。

整備技術に関しては幼少の頃から様々な書籍から知識を学び実践することを強要される環境で生きてきたために高いものを持つと自負してはいるが、ゲームのように修理スキルが低いとも考えられない。この世界にいる技術者の水準を知る意味でも価値は有るといえるだろう。

これらを実行するためにカンタベリー・コモンズに行くことは必須条件であり、今回はメアリーの用事を手伝うことは出来ないだろう。

「……部屋の一番奥にあるキャビネットを開けてみる。きっと役に立つと思うから」

「? はい」

メアリーは言われたとおりにキャビネットを開きそこにあるものを取り出した。

「これは、……レーザーライフル? でも、形が少し違いますね」

「スナイパー・レーザーライフル。レーザーライフルを改造し高倍率のスコープを取り付けてエネルギーの出力を上げたものだ。出力の向上で機関部が肥大すると共にバレルを伸ばしたことで結構重くなってるけど、それに伴い威力はパワーアーマーを貫通するほど高くなっている。弾薬であるマイクロフュージョンセルを三倍消費することになるからそこにだけ気を付けてくれ」

「これ、本当に貰って良いんですか？」

返しませんよとばかりにこちらに期待の眼を向けてくるメアリーを可愛らしいと思う反面、その反応がもう立派なウエイストランド人であること証明していることに少々やるせなさを感じた。

「ああ、がんばれよ？」

「はい、がんばります」

どちらからともなく笑い、会話が終わる。

さて翌日の朝。

つまり今日の朝であるが、俺は一人荒野を彷徨っていた。

というのもカンタベリー・コモنزの場所がまだマツピングされていないためキャラバンの人たちのルートを先回りして場所を聞こうと考え、俺はエバーグリーン・ミルズの入り口を目指していた。

「……居た」

谷の入り口に人影とバラモンを確認する。

しかし様子が可笑的い、まるで何かに追われているかのように一人と一頭はこちらに向かって走ってくる。

「おい、大丈夫かー!!」
「助けてくれー!!」

スーツと眼鏡が特徴的な男は俺の呼びかけに対してそう返した。

〔 another side 〕

昼間。

聖堂から旅立った私は、メガトンにある旦那様の自宅からヌカ・コーラを拝借していた。

聖堂には食料を保存するための冷蔵庫がないため食材は街で買ったり野生動物を襲わないといけない。

ただ野生動物の肉はあまり美味しくないのだ。

例外的なものはバラモンとミレルークなどが、これらは特定の場所にはかないないため食料として安定しない。

故にメガトンにて食料を調達し、ベッドでしっかりと休養をとり体力の回復に努めようと自宅を間借りさせてもらっていたのだ。

それにしても、メガトンの街は技術が進んでいる。

買い物途中にチラッと見た程度だがMr・ハンディによく似たタイプのロボットがものすごい速さで橋（もしくは道）を作っているのだ。

見る間に橋の形が形成されていくその様はまるで魔法のようだった。ロボットの癖に。

「今、どこまで完成したんだろう？ ……ちょっと見に行ってみようかな」

私は自身から湧き上がる野次馬根性を抑えようともしせず外へと出た。

「これは……、すごい」

正に魔法である。

爆弾のあつたはずの広場に簡易的なビルのような建物が建っていてそこを中心にメガトンを鉄の床で三階層に分けまるで要塞のような街へと変貌していた。

「パーフェクトだ、こちらのオーダーに的確且つ迅速に答える性能は実に素晴らしいぞMr・ブラウニー」

「お褒めに預かり光栄だ。しかし、言っただろう？ 『完璧に仕上げさせて見せてもかまわんのだろう？』と」

前方にて件のロボットとカウボーイ風の男、ルーカスがそんな会話を繰り返している。

「メガトン、恐ろしい街ね」

下手なB・O・Sよりも高い技術を持っているのではと考えながら様変わりした街を見回した。

「次はメガトン市民の生活環境改善をテーマにそれぞれの家をリフォームしてもらおう。これが成功すれば住民間での無駄な争いが減少するだろう。……難しいとは思うが、引き受けてはみないか？」

「ふっ、難しい筈が無い。元よりこの身はただそれだけに特化した電子回路だ。今回も完璧に仕上げてみせようではないか」

「頼もしい限りだよ、Mr・ブラウニー」

一人と一機はまた何か画策しているようだった。

ep11 (後書き)

今回は所々場面が飛んでいるような感じだった。
もう少し描写を丁寧にするよう心がけよう。
反省。

ep12 (前書き)

最近Failoutsをやり直してヒャッハーさん達にバイクを乗り回して欲しいと思ってしまった。

北斗拳的に。

それは関係ないけど十二話です。

「助けてくれー!!」

坊主で眼鏡なスーツ男とそのバラモンがこちらへ向けて走ってくる。バラモンに積載されている荷物を見るに医者か医薬品を売るキャラバンと見当をつける。

大方、キャラバンガードの姿が見えないことからレイダーかサソリにでも襲われて逃げている最中といったところだろう。

しかし、これは俺にとってはまたとない好機だ。

ここで恩を売りこの後の交渉を有利に進めることの出来る状況だ。

「それじゃあ一つ、人助けと行きますかね？」

俺は小さな声で呟き逃走を続けるキャラバンの下へと駆け出した。

「新鮮な肉だぜー!!」

案の定、キャラバンを追い掛け回していたのはレイダーの群れだった。

いや、大群と言ったほうが正しいだろう。

数にして三十人、レイダー達はそれぞれ多様な重火器をその手に持ちキャラバンを責め立てる。

「(ま、まずい。これは不味いぞ!)」

キャラバンの男、Dr. ホフは命の危機に冷や汗を流しながらも生存の為にその思考を動かし続けていた。

「(キャラバングードがやられた。くそっ、高い金を払っていたのにっ! ……いや、今はそんなことよりも生き残ることを考えるべきだ!! どうする? どうすれば……)」

石や瓦礫のような大小様々な障害物に足を捕られそうになりながらも生き残ることを考えて逃げる。

だが、

「ぬおっ!?!」

これまでの疲労が出たのか脚を縛れさせてしまう。

「医者を呼べえ、流血患者だあ!!」

「(私が医者だっ!)」

集団の先頭を走っていた足の速いレイダーがホフに追い付き、その眉間へと10mmサブマシンガンを突き付けて叫ぶ。

絶体絶命という言葉を使うのならばこれほど適した場面は無いだろう。

その時のホフに生まれた感情は諦めだった。

逃走の最中に自らの得物を失い、自分の能力ではこの文字通り目前に迫った死を覆すことは出来ない。

仮に覆せたとして、この後に待ち受けるであろう大群と渡り合う術を持ちえていない。

ホフの冷静な思考はどこまでも平等に現状を見定めていた。

己の非力さも含めて、希望的思考を持たずに。

バン

銃声

だが、その思考を吹き飛ばすかのようにその銃声は大気を震わせた。

「な、に？」

驚き顔を上げたホフの眼に映ったものは頭を打ち抜かれたレイダーだった。

「そこのオツサン、聞こえるか！」

声の方向を見れば何かあれば直ぐに隠れられるよう岩の近くに屈み、こちらへハンティングライフルの銃口を向ける青年の姿があった。

「こちらへ逃げ込め！！」

ホフがレイダーの死体から10mmサブマシンガンを引ったくり青年の方向へ駆け出すのはその声とほぼ同時だった。

服や顔を弾丸が掠めていく中、ただ只管にホフは岩陰へ走る。

「！、右斜め前へ、跳べ！！」

声に従いその通りに跳ぶと元いた場所を5・56mm弾が連続で通過していく。

「匍匐前進、さっさと来い！」

バン、バン

銃声、銃声

青年は、ケイトはハンティングライフルを続けて撃ちレイダー二人の頭を打ち抜く。

その間にもホフは匍匐前進で地を這いながらも移動を続けケイトの元へと辿り着き岩陰へと隠れた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ、助かったよ。しかし、これからどうする？」

残り二十七人のレイダーは今も走りよってきており、未だ危機を脱したとは言い難い状況であった。

「うん？ まあ、何とかするさ。そうだな、……まずは数を減らすうか」

ケイトはピップボーイのリーダーで敵の大まかな位置を把握し、グレネードを三つ程出して岩から身を乗り出した後その方向へと投擲する。

「ガッ！？」

「グッ！」

「ゴホッ」

グレネードは怪力により生まれた物凄いスピードで投げられ、それぞれのレイダーの頭、腹、顔に当たり爆発した。

「よし、これで三分の一が戦闘不能だ。ここで隠れててくれ、直ぐに終わらせる」

ケイトはピップボーイから10mmピストルとコンバットナイフを出して残りのレイダー達の下へ駆け出した。

「いやあ、助かったよ。あの時はもう駄目かもしれんと思ったよ」

それから十分も経たない未来。

そこにはレイダーの死体とそれから武器や防具を剥いで自らの懐に納める二人の男の姿が合った。

D・r・ホフとケイトである。

ホフは命の恩人であるケイトに純粹な感謝の念を伝えた。
剥ぎ取りを続行しながら。

「まあ気にすんなよ、ところであんたはキャラバンかい？ ……お、この10？サブマシンガン状態良いな」

対するケイトは気にしなくて良いと答えた後でホフの素性を探る。その間も手は止まることがない。

「ああ、一応これでも医者でね。医薬品を売ったり治療代を貰ったりしてキャップを稼いでいるのさ。……む、ジェットか。丁度切らしていたところだったな、有り難い」

「へえ、お医者さんかい。でもバラモンもキャラバンガードも連れていないところを見ると手酷くやられたようだな。……ん？ 珍しいな、スコープ付き44マグナムをレイダーが持っているなんて」

ホフの現状を分析し、自分の話しやすい環境へと会話内容を変えていくケイト。

だが手は止まらない。

「それは良かったじゃないか、44は心強いぞ？ キャラバンガードはさっきの奴らに奇襲を受けて死んでしまったんだ。バラモンは内で手塩に掛けて育て抜いた子だから、銃声が聞こえなくなればその内戻ってくるよ。……ほら、噂をすれば何とやらだ」

ケイトは手を止めてホフの指し示す方角に眼を向ける。見れば遠くに何かの影があった。

数秒眼を凝らして見る、とそれが猛スピードでこちらへと走ってくるバラモンであることが判明した。

「そいつはご愁傷様だな。何なら護衛に打って付けの奴を紹介しようか？ って、こら」

言ってケイトが振り向けば、既に粗方の剥ぎ取りを終えたホフの姿がそこにはあった。

「いやあ、つい手が勝手に動いちゃって。だが言われて真っ正直にそちらを見てしまう君も少し不注意だよ?」

「……まあそうだけどさ。で、どうよ?」

釈然としない感情を心の内に押し込め、ケイトは話を進めることにした。

「ああ、紹介してもらえるのなら是非、と言いたい所だがそいつの人と成りを見てからだ」

「“人”と成り、ねえ。なら存分に見定めれば良い、幸いにも直ぐ近くに居るからな」

「そうか、では早速、っとその前に」

「何さ?」

「助けてもらった手前言いづらいのだが、銃火器の携帯いを許して欲しい」

「断らなくてもソレぐらいは当然だろ、良いよ別に」

ホフは条件を提示しケイトはその条件を受け入れる。

交渉が成立すると二人は荷物を纏めて聖堂へと歩き出した。

おまけ

↓地下鉄迷走↓

「元気かい？ ウェイストランドの皆、スリードッグだあ！！
犬一匹では足りない、二匹でも少なすぎる、だーから、スリードッグだ。先日エバーグリーン・ミルズ近くでレイダーの大群が人を追い回していたという情報が我が俺の下に飛び込んできた。レイダーが近くに居たら……え、何？ ………………ワオ！！ そいつはすげえ！！ 聞いてるか皆？ さっきの話、そうレイダーの大群の話を忘れたスカポントンはこのラジオのリスナーにはいないことを願ってこの飛びつきりのニュースを伝えるぜ！！ そいつは一人でやって来た。レイダー共に追われて逃げ回る一人の男の額に突きつけられた銃口。正に絶体絶命の時、奇跡の如きタイミングでその男が、奴が現れた！！ 奴は卓越した戦闘技術をこれでもかと思せつけてレイダーの大群、数にして凡そ三十人を打ち破った！！ そんな人間有り得るのかって？ 現に奴と助けられた男がレイダーの死体から銃器や薬品を回収している姿が多数の人に目撃されている現状から考えると嘘とは言い切れないぜ？ ……これだけ聞けばこいつが良い奴に聞こえるかもしれないが実際の所はどんな奴かは良く解らない。ウェイストランドで奴のことを見かけたらG・N・R・まで情報を送ってくれ！！ 俺はスリードッグ！！ ウワオーン！！ こちらはギャラクシーニュースラジオだ！！ どんな残酷な真実でも有りのまま、君にお届けするよ？ ではここで一曲……………」

プツ（ラジオを切る音）

「……………やだ、エバーグリーン・ミルズって家の近くだわ」

やたらとテンションの高いラジオ放送を止めて薄暗い地下鉄の中を

見回す。

ウェイストランドにとって地下鉄は魔窟だ。

グールの大群、レイダーのチーム、スーパーミュータントの小隊などのようにどいつもこいつも厄介な相手ばかりだ。

更に地下鉄は狭いためスナイパーライフルのような大きい銃は扱いづらく、私との相性は最悪とも言える。

「……………旦那様、元気かな」

そんなストレスの溜まり易い地下鉄生活のおかげか私は旅を始めて五日ほど時間が経過した現在、ホームシックを味わっていた。

ストレスを増大させる原因にはひもじさや喉の渇き、安眠できないことなどが関わっており私ことメアリーの精神は日に日に荒んでいた。

「ニンゲン？」

「ドウスル？」

「捕マエル？」

壁に寄りかかった私に向かっていつからいたのかスーパーミュータントが手を伸ばす。

タン

銃声

「私に触れるな、そして死ね」

油断しきっている三体のスーパーミュータントの頭部へと10mm弾を打ち込んでいく。

弾け飛ぶ血肉で顔を汚しながらキルスコアを数えた。

「スーパーミュータントはこれで52体目か。グールやレイダーを合わせるともう直ぐ四桁に突入しそうだな……」

壁に預けていた身体を起こし再び歩き出す。

「……………、何で、お父さんはVault101を出て行ったのかな」

口にした疑問には誰も答えない。

そして心の中で何度も否定してきた考えが頭を過ぎる。

自分は捨てられたのでは、と。

「は、らしくないな。私は、こんなに弱くないのに……」

無くなるどころか日が経つごとにその存在感を膨れ上がらせる不安を抱えながら今日も私は歩き続ける。

ep13 (前書き)

少し遅れました。
更新です。

話が思うように進まない。

聖堂の入り口でホフは目を見開き立ち尽くしていた。

その光景を見たホフは開いた口が塞がらなかった。

彼にとってスーパーミュータントとは制御されることのない力、人為的に生まれた台風のようなどうしようもない存在だった。

ホフに限らず、ウェイストランド人の大半から意見を聞いたとしてもこの考えに異を唱える者はそうそう居ないだろう。

その暴力の象徴たるスーパーミュータントが、

「おお、かつこいいなこれ!!」

「斧、か。重さで切断するというのも有効かもしれないな」

「こいつら旨そうだな、どこにいるんだろう?」

三体寄り添って漫画本を呼んでいるのだから驚くのも無理はないだろう。

首から上だけを見れば某アニメ映画に登場する「オイ、オイ」と煩いダルマのような何かに見えるだろう。

「これは、どういう……」

思考が追い付かず、答えを求めるように呟いたホフ。

だがその腕は思考に関係なく腰に下げている武器を求めて伸びる。

頭が動かなくとも危険を排除するために身体へ働きかける本能は流石ウェイストランド人というべきか。

「待ってくれ、こいつらは安全なスーパーミュータントだ。危険はない」

「スーパーミュータントが安全であってたまるか！？ どう考えたって危険じゃないか！！」

「固定観念で考えると危険だぞ？ 常に柔軟な思考を心掛けなくては」

「これは常識というのだっ！！」

自分を止めようとするケイトの発言に対しホフは叫ぶ。

混乱する思考は「とりあえず撃とう、話はそれからだ」とでも言うようにケイトの制止を無視し武器へと延びる。

「こらこら、まずはその腕を止めるんだ。さもないと……」

「さ、さもないと？」

再び発せられるケイトの制止に、ホフはようやく勝手に動いていた右腕に気付きその制御権を取り戻す。

「あいつらがその手に持っているアサルトライフルをあなたに向かってぶっ放すだろうよ。よく見てみる、あいつら漫画読みながらも片手でアサルトライフルを磨いてるだろ？ それに10mmでスーパーミュータントの表皮にダメージを与えようってんなら至近距離から撃ちこまないといけない。そうでもしないとあいつらは攻撃されたことに気付いて直ぐに撃ち返してくる。仮に至近から撃てたとしても奴らの数は3でこちらは1だ。どちらにしる火力不足なお前は積んでいる」

一息に現在の状況を教えるケイトの言葉にホフは押し黙る。

そう、ホフの装備はスーパーミュータント三体を倒しきるだけの火力を持たない。

10mmサブマシンガンは対人戦を想定したものであり、決して対化物用などではないのだ。

「だが、しかし……」

「だから大丈夫だって。ほら、今話すから不安なら玄関から見てるよ、直ぐ脱出できるように」

「……解った」

ホフは玄関の壁に身体を隠すようにスーパーミュータントの下へと歩いて行くケイトを観察する。

それでも不安を拭い去ることの出来ないホフは無駄だと知りつつも武器に手を掛けておくことにした。

なんてことはない、ただの気休めだった。

「今帰ったぞ」

「お、ボスお帰りなせえ」

「ボスから借り受けたこの本、凄く面白かったです」

「腹、へった」

「ただいまジョナサン。ただいまクリフ、続きが見つかったらまた持ってくるよ。そしてジェイソンは相変わらずだな」

ケイトは帰還を知らせるとスーパーミュータント、それぞれジョナサン、クリフ、ジェイソンと会話し始めた。

再び驚愕するホフ。

あり得ないと考えていたことと命の危険が立て続けに起こり思考が混乱してはいるが、ケイト達の様子を見て取りあえず危険は無いらうと判断する。

「今日はお客さんがいるからあまり失礼なことを言わない様に気をつけるよ、特にジェイソン」

「ボスの方が失礼だあ！」

「ケンカ売ってんのかコラ、買うぞゴラアってそうじゃなかった。と言う訳だから皆武器から手を離してそこに整列してくれ。……ホフ！ 危険じゃないことはこれで解つたろ？ 護衛の件について話すからこつちに来てくれ！」

ホフはケイトの呼ぶ声に数秒ほど迷った後にケイト達の方へと向かった。

現在の状況を一言で説明するならば宴会という言葉が最も適當だろう。

ケイトはホフにジョナサン達を紹介した後、ホフを歓迎する為に食事と酒を振る舞うことにした。

食事の内容はバラモンのジャーキー、一走りして捕ってきた新鮮なミレルークの刺身とそのカニみそ、ヤオ・グアイのステーキと言ったところだ。

ウェイストランド基準で考えるとそれなりに豪華な食事だろう。

酒は大戦前に製造されそのまま存在を忘れ去られていたワインにウイスキーのそれぞれ十本、計二十本が食卓に置かれていた。

久方ぶりに栄養価の高い物を食べたホフはすっかり機嫌を良くし、

何時しかスーパーミュータントに対する危機感を薄れさせていた。

「……さて、腹もそれなりに膨れてきたことだしそろそろ護衛の話に移りましょうか」

「おっと、旨い食事に夢中になって本題を忘れるところだった」

「それはそれは、持て成した側としても鼻が高い。……では護衛を紹介するが、もう気付いているだろうが俺の紹介する護衛はスーパーミュータントだ」

単刀直入にケイトはスーパーミュータントを護衛として連れていく利点を説明した。

圧倒的な攻撃力で敵を退け、その怪力で荷物を運び、野生のスーパーミュータントが襲ってきたときの交渉役としても役に立つ。ケイトはその他にもセールスポイントを並べて説明を続ける。

「確かに得な買い物だろうな。しかし、それだけの物を提供してこちらには何を求める？」

買う商品の価値が高ければ高いほど払う対価も上がる。

ホフの懸念とはこの優れた護衛を得るための対価がどれほどかということだった。

「まあ、気になるだろうな。俺がそちらに求める物とはある物の制作以来だ。場合によっては金も払うさ」

「制作以来……、つまり私を通じてカンタベリー・コモンス全体に依頼を出したいという訳か？」

「ああ、その通りだ。依頼できそうなところの心当たりがあんたらしかなかったからな、今回の件は都合がよかったよ」

「ふむ」

ホフは顎に手を当てて考える。
受けない手はない。

戦闘力の低いホフにとって護衛は無くてもならない存在だ。
また今回の護衛はスーパーミュータントである。

メリットとデメリットを考えた場合メリットの方が大きい。
スーパーミュータントは直ぐに死ぬ人間の護衛とは違い銃弾が数発
当たっても死なない。

だがスーパーミュータントだ。
商売相手にどう思われるだろうか。

デメリットとなるであろう問題はこれ他にも多く出ている。
ホフは自分一人で決めるべき問題ではないと考えた。

「……カンタベリー・コモンズへ一緒に来てくれないか？ この話
は私個人で決めるべきではないと思うんだ」

「オーケー、直接言った方が速いってこともあるだろうしな。ジェ
イソン！ 今回はお前だ」

「おう波斯！ 暴れても良いんだろう!？」

さっきまで呼んでいた漫画本を放り捨て起き上がりながらジェイソ
ンが言った。

「やる気は十分か、出発は明日で良いか？ ホフ」

「ああ、構わない」

こうしてケイトとホフ、ジェイソンはカンタベリー・コモンズを目
指すこととまった。

おまけ

↓ 地下鉄迷走 2 ↓

メアリーは10mmピストルを構え狙っている対象を睨みつけた。
その男はメアリーに狙われながらもソード・オフ・ショットガンを
メアリーに向けて脅しの言葉を吐いた。

「もう一度だけ言うぞ？ ……セクシーな寝巻を渡せ！！」
「だから持っていないってばあ！！」

メアリーがこの男に追いかけて地下鉄を走り周り既に三日が経
っていた。

「そんな訳が無い、お前が開けたあの扉の向こうにセクシーな寝巻
があつたんだ！！」
「だから知らないってば！！ それならあの部屋にあつた金庫にで
も入ってるんじゃないの！？」
「き、金庫お！？」

メアリーの発言を聞き男は素っ頓狂な声を上げた。

「何で今まで言わなかったこのアバズレ！！」
「あ、あばっ、貴方が人の話も聞かないでショットガンを乱射して

きたからじゃない!!」

「何だとお!? くっ、こっしちやいられない直ぐに戻らねえとっ」

「待ちなさいよこのキチ○○」

「何だ! 今忙しっ、ひいい!!?」

男が振り返って見た物はスナイパーライフルの銃口だった。

「……………しの」

「へ?」

「あたしの、三日間っ、返しなさいよお!!」

バガン、バガン、バガン

発砲音、発砲音、発砲音

地下鉄に響く銃声。

今日の地下鉄はいつもより騒がしかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6073s/>

fallout3/「ヤメロー！ スーパーミュタントども、ぶっ飛ばすぞ！！」と少年

2011年11月26日00時57分発行